

犬夜叉 時を繋ぐもの

アマゾンズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

枢木神社の一人息子、枢木真嗣（まさつぐ）は中学生の時に不思議な体験をした。

その後、四年の月日が経った。時間の壁を乗り越えるとき、再び冒険が始まる！

式神と呼ばれる能力と共に。

※この作品は原作推しの方には向きません。

犬夜叉 呪詛の仮面の主人公を基本に一人称、年齢、口調などを変えてオリ主とします。

ヒロインは珊瑚、準ヒロインは桔梗となります。

恋愛に関しては基本は片思いです。準ヒロインは憧れとなっています。

時間系列がズレていますが最初だけです。

キャラクター同士が喧嘩はしますが、アンチにはしません。アンチになるのは基本、差別や凶暴な妖怪などです。

目次

オリキャラ&武器図鑑	1
それぞれの時間と想い	4
時間の壁を乗り越えて！	13
再び戦国へ、旅の共の名は珊瑚!?	19
彩水と珊瑚の特訓	33
復活の五色五行刃	40
四神の一太刀、炸裂！朱雀の息吹！	48
月下に輝く刃	57
最高の鍋料理	62

オリキャラ&武器凶鑑

オリ主

名前 柘木真嗣（くるるぎまさつぐ）

年齢 19歳（戦国時は逆行して肉体のみが16歳に若返る）

身長 170センチ

外見は呪詛の仮面の主人公を弥勒に近くして大人っぽくした感じ。

詳細

現代に生きる人間で現在は大学一年生の後半にさしかかり、二年生になる前の時期。

中学生時に戦国時代へタイムスリップしてしまい、そこで犬夜叉、かごめを始めとする一行に出会い、現代へ戻る方法を模索した。

旅の途中、自身を呼び出した張本人、ウツギと己の中に眠っていた式神を扱う力を目覚めさせられた。

式神に目覚めた時に浮かれてしまい、戦国の村を崩落させかけたことがあり、一行に諫められた経験と式神に見放された事があり、己を高める努力をそこで誓った。

ウツギと共に奈落がいた為、縁が出来てしまい結果、奈落を倒す旅に同行した形となってしまうた。

ウツギを取り込んだ奈落を倒し、ウツギの最後を看取ったと同時に現代へ引き戻され、完全に戻る前に珊瑚自身へ好意を抱いていた事を伝えて、現代へ戻った。

戻った時間は夕方だったが、祭りの時期の周期が回って半年後の祭りの夕方になっていた。

そこからタイムスリップする事はなくなり、現代の人間として中学と高校を卒業、大学生となって生活している。

中学生時は全く出来なかった家事（主に料理など）を母親から教わった為、一通りできる。特に鍋料理は家族からお墨付きを貰ったほど上手くなった。

恋愛に関しては珊瑚への想いを引きずっており、未だ吹っ切れてはいない。

現代に戻っても式神を扱いつつ修行し、現代の妖怪退治も隠れて行っている。

後に式神使いを鍛える道場に放り込まれ、無手の格闘術(空手と柔、柔道など)と神道無念流の流れを汲む剣術を叩き込まれる事になってしまったが、これも修行と毎日続けている。

後にタイムスリップしてしまい、戻る方法ではなく、行き来が出来る方法を模索する事となる。

時空の歪みの影響で戦国時代に現れると肉体が16歳まで若返ってしまう。

オリキャラ2

名前 藤乃森 彩水 (ふじのもりあやな) 本名は藤乃森 珊瑚

年齢 19歳 (真嗣と同じで戦国時は16歳に肉体が若返る)

身長 167センチ。スリーサイズは珊瑚と同じ。

外見は珊瑚と変わらないが髪に天然ウェーブがかかっている。

詳細

真嗣と同じ大学に通う同い年の女性。

珊瑚の生まれ変わりで、瓜二つだが性格が若干違う。実家は代々、あやかしと戦う家系であり、飛来骨を先祖の武具として祀っている。

長女は代々、珊瑚の名を継承しており、彼女自身も何代目かの珊瑚の名を継いだ。

常に強くあれ。という言葉を実践する為に道場へ通っており、大学と道場の二つで真嗣と出会う。

実家の歴史を研究するというお互いに同じ目的を持ち、一緒にいることが多くなった。

飛来骨に触れた時、タイムスリップしてしまい、そこで妖怪などとの出会い現代への想いを馳せるが、初代である珊瑚との出会いによって少しずつ順応していく。

後に珊瑚を主に犬夜叉達に鍛えられ、退治屋の形見の武具の一つである月下刃(げっかじん)を珊瑚から渡され、愛用する事となる。

真嗣と同じで戦国時代に飛ばされ、肉体が16歳まで若返ってしまう

う。かごめの家庭教師も兼ねる。



オリ武器

五色五行刃（ごしきごぎようじん）

刀の柄巻きに五色（地水火風空を表す色）の布と四神の力を持った小さな玉がはめ込まれている刀。

自然の式神の力を所有者が分ける事で、木火土金水（もくかどごんすい）の五行の相克、相生、相勝を使うことが可能になる。自然の式神を扱う式神使いか位の高い巫女でないと所有する資格を認めない。妖と善の相反する性質を持ち、所有者の心の動きを読み取り、邪に近ければ怨みや憎しみといった負の感情が力になり、逆に善へ近づけば浄化と聖なる力が強くなる。

元は刀々斎が珍しく人間へ鍛えた刀であり、式神使いの武器として制作したもの。

歴代の中で使いこなした式神使いは片手で数えられるほどしかない。

現在は刀身の鋒が折れており、繋ぎになるものがない為、修復する事が出来ない状態にある。

月下刃（げつかじん）

妖怪退治屋の里にあった。刃が収縮自在の月刃のチャクラムのような武器。

妖怪の骨や髄液を使って鍛えられている為に切れ味は鋭く、鎖によつて距離を変える事もできる。

彩水の愛用武器となり、使われていく事になるが今現在は封印されている。

それぞれの時間と想い

某日、 柘木神社。

「ふう、掃除はこんな所かな」

「おい、真嗣！掃除が終わったらすぐに手伝いなさい！」

「はーん」

俺の名前は柘木真嗣。ここ、柘木神社の神主の息子だ。今ではもう二十代なりかけの大学一年生だ。

中学生まで「僕」だった一人称も「俺」に変わって、少しずつ自分が年齢を重ねて来ている事を感じてきている。

今でも中学生の時に起こったあの出来事を昨日の事のように思い返せる。あれは今と同じ、柘木神社のお祭りの準備を手伝おうとしていた時だった。

土蔵へ祝祭に必要な物を取りに行つて、床から不思議な光が溢れて気づいた時には戦国時代へとタイムスリップしていたんだから。

その戦国の時代で出会った、乱暴だけど優しい半妖である犬夜叉。同じ現代人で戦国の巫女の生まれ変わりの日暮かごめさん。女好きですぐに女性に手を出すけど法力を使いこなす実力は本物の法師様の弥勒様。気立てが良くて、美人で妖怪退治を専門にしていた集落出身の珊瑚さん。外見はちっちゃくても考えがしっかりしている子狐妖怪の七宝。

戦国の世界で俺を仲間として受け入れてくれて、現代に戻る方法を共に探してくれた大切な人達。

そこで覚樹と名乗るばあちゃんから式神を目覚めさせて貰えたのは、驚いた。自分の中にそんな力が眠っているとは、思いもしなかったからだ。

現代と戦国じゃ価値観が違っているし、眉唾かな？と疑問にも思つた。実際に使つてみた時は感動し、浮かれていたけど、あの時の自分を殴りたいと考えた事は一度や二度ではなかった。

浮かれていた俺は蛇紋岩を見つけ出しては手当たり次第に崩していた、そんな時、一度だけとある村を崩落させかけた事があった。

怪我人も死人も出ないで済んで、村も無事だったから良かったけど、あの時だけは犬夜叉と弥勒様に本気で殴られ、珊瑚さん、かごめさん、七宝から説教された。

本当に思い返すだけで顔から火が出る。なんて馬鹿な事をしたのだろうか。

一時期、それが原因で式神に見放され、己の身を守る事しか出来なかった時があった。その時はしばらく、楓の村に留まって己を見つめ直した。

楓の村の村長である老巫女の楓ばあちゃんから、修行の方法を教わり、ひと月ほど滝行と自分の時代の勉強をこなし、自然と一体化出来るように頑張った。

そのかいあって、式神達からもう一度、機会を貰うことが出来た。地・水・火・風・空、その全てを理解出来たとは言えないけど、火、水、風までの基礎の式神は習得し、昇華させた。



「回想なんて、今の俺らしくないな・・・未練がないといえは嘘になるけど」

そう、たった一つの未練を戦国の世界に残してしまっていた。それは恋慕だ。

中学生の恋なんてこの時代からすれば、子供の遊びにしかならないと考えられてしまう。だが、戦国の世ではそうではなかった。

父さんに聞いた話によれば戦国時代では、十五歳で元服と呼ばれる成人の儀があり、そこで初めて大人と認められるそうだ。

俺の残した恋慕の思い、それは珊瑚さんへの想いだった。あれから数年経った今でも振り切れないでいる。

現代に戻ってから、高校時代に告白された事は何度もあったけど、どうしても付き合う気にはなれなかった。

それは単純な答えで、戦国の女性の強さに惹かれてしまったから。現代は思ったことがほとんど実現してしまう。

それが当然と考えている人が多すぎて、嫌になってしまったというのも本音の一つだ。自分の事を自分でなんとかする、そんな当たり前の事を身に付けている戦国の世界に心が奪われていたのかもしれない。

「つと、いけないいけない。準備しなきゃ」

祝祭の準備を父さんと共にしていると、突然父さんから話しかけられた。

「真嗣、お前・・・うちの神社の歴史が知りたいとか言っていたな？」

「え？ああ・・・大学の課題用だね」

何故、父さんはこんな事を聞いてくるんだろう？そんな疑問が頭をよぎる。そう思っていると父さんは古びた一冊の本を俺に手渡してきた。

「これは？」

「戦国時代における枢木神社の書だ。この時代に生きた巫女が書き残したと伝えられている」

「！」

戦国時代と聞いて心が高鳴った。もしかしたらという考えが深く頭の中を駆け巡っていく。俺はそれをわずかに震えながら手にとった。

「この本には歴史の他に術に関することも書かれているようだが、私には解読できなかった。それでもいいなら読んでいいぞ」

「う、うん！しばらく借りるよ」

◇

手伝いを終えて、夕食も取り自室に入ると父さんから渡された古本を開いた。そこには枢木神社の建造理由、御神体、神社の由来に関する事が書かれていた。

「やっぱり・・・」

捲っていくとそこには見覚えのある巫女の名前があった。戦国の世で50年前の当主であり巫女でもあった覚樹という名前。

その巫女は稀代の式神使いであったという。同じ式神使いの巫女は居たが、地水火風空の術を使いこなし、結界術にも優れていたという。

「覚樹ばあちゃんって・・・若い時は桔梗にそっくりだったんじゃない？」
桔梗というのは戦国時代で出会った巫女さんで、かごめさんの前世であり、犬夜叉の初恋の相手でもあった女性だ。当時の外法と呼ばれる秘術で蘇ってきたと聞いた。

俺からすれば当時の女性の強さを教えてくれた人で、憧れの女性でもある。あくまでも憧れであって、この人が理想像だとか、そのくらの考えしかない。

「ん？この記述・・・蛇紋岩に関してだ。それに・・・この位置、本堂の地下だ。父さん、言っていたな。本堂の地下には強力な封印が施されている場所があるって」

そう考えながら読んでいると最後の一文が手書きのようで書き足されていた。そこには・・・。

『溢れる碧空よ、かの者を導き給え』

思わず読んでしまった。瞬間、地震が起きたがニュースなどで速報は入らなかつた。直下型としても規模が小さい。

「何だったんだろう？一体」

時間はまだ19時、就寝には早すぎる時間だ。好奇心から本堂の地下へと降りることにした。小さい時は仕掛けを勝手に動かして怒られたが、今はない。

「えっと、確かこの柱に・・・あった！」

隠しスイッチにあたる部分を押し込んで地下への階段を作動させる。すると同時に扉が開き、地下へ案内されるような錯覚に陥る。

「この地下、今は簡単な物置になっているけど・・・この中心の壁、蛇紋岩で出来てる！よし、それなら」

『揺らめく炎よ・・・蛇を焼き払え』

現代においても式神の力は失われていなかった。理由は分からなけれどなにかきつと意味があるのだろう。

式神の力に反応した蛇紋岩の壁は一人が通れるくらいの隙間を

空けて崩れた。その反動で祝祭用のロウソクが数本転がってきたので手に取る。

「これ．．は、覚樹ばあちゃんが弥勒様に渡した御札．．かな？暗いし古くて破れてるから何とも言えないけど」

そこは修行のための空間だった形跡があった。明らかに人の手が加えられていて、御札などが壁に貼られていたからだ。

「．．．えっと、さっき崩した拍子に転がってきたロウソクを．．．」
式神の力を利用して、ロウソクに火を灯すと同時に見えた燭台にロウソクを立て、左右に均等になるようにする。

空間全体が揺らめく炎に照らされ、全てが視界に入ってきた。

「戦国時代の祈祷用の台座．．その上には本？かな．．．」

本らしき物を手に取ろうとした時、何かピリツと走ったような気がした。気にせず本を取るとその中を読もうとすると、もう一冊の本が何かでくつついていたらしく、出てきて地面に落ちた。

「ああ!?良かった本は無事だ．．まずは先に一番上の本を読んでみよう」

どうやらそれは日記のようなものだった。特に覚樹ばあちゃんの事が書かれているみたいだ。どうして俺が戦国時代の文字を読めるのかというと、式神の力を使っているからだ。

式神は元々、自然の力を形にしたもの。時代を超えて生きている、言葉は喋らせる事は高度な技術を身に付けなければならぬが、文字の翻訳くらいなら今の僕でも十分できた。

もつとも、昔の日本語を翻訳する事くらいしかできないけど。



50年前、先々代の当主であり、式神巫女の名を与えられた覚樹様は美しく、優しく、また厳しさも持っておられた方であった。

そんな折、四魂の玉と呼ばれている物が現れたそう。清めの巫女の選定を受けるべきだと周りからは言われていたが、覚樹様は「私で

はない。…浄化の力が私以上に強い者がいる」と選定を受けなかった。

その力を持つのは誰なのかと尋ねたら、武蔵の国の桔梗という巫女がそうだとおっしゃっていた。覚樹様も顔を見たことがないそうで、どんな巫女なのかはわからない。

「これ、…世話役の人の日記みたいだ。最後は…破れてる。仕方ない、もう一冊の方を読んでみよう」

もう一冊の方は識神に関する修行方法が書かれていた。それだけじゃない、何かを伝えようとする文面も見つけた。

『次世代の者よ…もしも、偶然というものがあるのなら、この本が残っていることを願う。そして読んでいる子孫よ、自然の式神使いの目が振るうことを許された牙（刀）を探し出して欲しい』

「牙つて…刀の事かな？」

修行の方法と技を昇華させる基礎訓練の方法、地水火風空の五行、木火土金水の五行、二つの五行の修行方法まで細かく書かれていた。

「覚樹ばあちゃん…」

修行方法だけが書かれている本だけを部屋へ持ち帰り、就寝することにした。明日はまだ忙しくなる、そう考えながら。



時代が変わって戦国時代、楓の村。

奈落を追っている犬夜叉一行。その一行も毎日旅している訳ではない、時折こうして楓の村に帰ってくる事で骨休めをしているのだ。

「んぐんぐ、ふおれひいてもよ？あいふはひなふなつて、ふいぶんはつんはな」

「犬夜叉！口に物を入れながら喋らないの！」

「…ふう、やはり一人欠けたのは大きすぎますな」

「……」

「どうしたのじゃ？珊瑚？ボーツとして」

「え？ああ、何でもないさ」

犬夜叉はかごめが持つてきた大盛り系のカップラーメンを食べており、弥勒は緑茶を啜っていた。七宝はお菓子に夢中になりながらも仲間を気にかけており、珊瑚は何かを考えている様子だ。

「つんぐ！だがよ、アイツはかごめと同じ国に帰っちまったじゃねえか」

「そうね。私のように井戸を通ってきている訳じゃないし・・・」

「彼には此方へ来る際、ウツギという繋がりがありましたからね、今となつてはそのウツギも枢木神社に吊われています」

「あ、珊瑚ちゃん？」

「ちよつと、外に出てくるよ。大丈夫、遠くには行かないさ」

「だったら、私も」

「いや、一人になりたいんだ。すまない・・・法師様」

そう言つて珊瑚は小屋から出て行つてしまった。近くの小川まで出向くために。残つた四人のうち三人は珊瑚の様子が違う事に対する原因を思い浮かべていた。

「やはり・・・あの言葉が効いているのですな」

「最後の最後つてやつだったもんな」

「うん・・・」

「何の話じゃ？」

七宝以外が話している事、それは真嗣が現代へ戻る際、珊瑚に言つた言葉だ。好きだった・・・と。

同じ女性に惚れている身としてはお互いにどちらが先に、惚れさせられるか競いたかつたのが弥勒であつた。

彼は旅の途中で自分が体調を崩し、幻を見せる妖怪と戦つた際に真嗣が珊瑚に対し好意がある事を見抜いていた。

それを本人に問わなかつたのは法師としての自分の戒めもあるが、何よりも心の内を暴かれるのが嫌なのを誰よりも自分が理解していた為だつた。

「まさか先を越されるとは思わなかつた。だが・・・引つかかる、何故好きだつた」・・・だつた、なのだ？」

弥勒は少し考え込むと、かごめを見て合点がいった。真嗣はかごめと同じ国の出身、一度戻ってしまえばもう会う事は叶わない。だからこそ、自分の気持ちを伝えたが、二度と自分は想い人に会えないと自覚して「だった」という言葉を使ったのだと。

「カツコつけやがって・・・」

思わず素が出て、小声で口にしてしまった。女に惚れるのは突然ある事だ、それを咎める気はない。

二度と会えないからといって、なかった事にしようとするのは許せる事ではなかった。同じ女に惚れた者同士として。

◇

その頃、珊瑚は草履を脱いで小川に足先を入れつつ、考え事していた。真嗣の最後の言葉、自分に対する告白の言葉をだ。

退治屋として生きてきた自分にとって、異性を意識した事はほとんどなかった。男に告白されたのはあれが初めてだった。

「・・・馬鹿だね」

それしか出てくる言葉がなかった。でも、気持ちは解る。アイツはかごめちゃんと同じ国の出身、突然現れて、突然消えていった。

最後の最後で好きだなんて言葉を残していった。でも、私は・・・今、法師様の隣にいる。法師様を好いている事も事実だ、けど・・・アイツの・・・真嗣の事が気になってしまっている。返事をしてやらないと私もアイツも先に進めない。それだけを考えている。

誰も悪くないのに、ここまで引つかかっている。私の気持ちも揺らいでいるのだろうか？

「はぁ・・・」

何度目か分からないため息を吐いてしまう。このまま引きずるのはよくないと感じながら。

◇

時間が進んだ現代では祝祭が終わりを迎えていた。父さんに地下の事を話したら真つ先に道場へ入門させられた。

父さんもお世話になった道場らしく、実戦的な剣道、柔道、合気道を叩き込まれそれを基本として昇華させた剣術、柔などをさらに叩き込まれた。

この道場は普通に鍛えているが、妖怪退治の血統を受け継ぐ家系だけが、剣術と柔を学ぶことが許されるのだそうだ。

剣術に関しては力で押していくのではなく、見切りと受け流しを主とする陰の剣術を身に付けさせられた。

「はあ・・・はあ、現代にも妖怪は・・・いるよなあ」

実際、真嗣は高校の教室で妖怪と戦った事があった。戦国時代の妖怪と比べれば、かなりの下級妖怪ではあったが式神の力を使わなければ勝つことは不可能だった。

父さんの話を最後まで聞くと、体術と身を守る武術を身につけておかなければ、式神使いはすぐに敗北するのだそうだ。

更に式神使いは己の式神を返されたら終わりだとも言うてきた。だからこそ、式神以外でも戦えるようにしておくのだと。

俺はこの言葉を戒めとし、毎日鍛錬した。でも、この時・・・思いもしなかつたんだ。

また、再会の時が来るなんて、そして・・・自分の身に降りかかる恐ろしくも嬉しいことを。

時間の壁を乗り越えて！

道場に放り込まれて、早2ヶ月、ようやく身体が慣れてきたところだ。剣術の方が段々と厳しくなってきた。

柔道と合気道、それに柔と空手に関しては合格をもらったが、剣術だけは未だに合格がもらえていない。

師範から「お前は心に何か引つ掛かりを抱えている」と言われてしまった。それは自覚している、恐らく珊瑚さんの事だ。

俺は珊瑚さんと別れる際に自分の気持ちを告白した。それが届いているかは分からないままに。

今思うと本当に珊瑚さんを好きになっていたのかと考える時がある。ただ憧れていただけなのでは？とも。

「よし、本日はここまで！残って練習する場合は一言声を掛けるように」

全体練習が終わり、一般の人達と共に自主練習を開始する。俺が教わっている場所は式神使い専用の道場で少し狭い。

そこから出て一般の人達にも教えている道場へ移る。そこでは竹刀を手に何度も素振りを繰り返す人、実戦的な稽古をしている人など様々だ。

「さて・・・と」

俺が向かった場所は居合いを練習する場所だ。基本の型から何度も居合いをして鞘に納める動作を繰り返すだけの稽古。

それだけでも長時間やっていけば、身体にかかる負担は大きくなる。その為に休憩しながら稽古を続ける。

そんな休憩時に思わず目で稽古を追ってしまう同年代の女性があった。そう、その女性はあの珊瑚さんにそっくりだったから。

まるで、そのまま戦国時代から来たのでは？と疑いたくなるほどだった。視線に気がついたのかこちらへ向かってくる。

「あれ？柩木君？」

「え・・・ああ、えっと」

「忘れたの？同じゼミの藤乃森、だってば！」

「ごめん、俺は課題を終わらせてすぐ帰ってたから」

「そういえば、実家が神社だものね。仕方ないか」

そう言つて藤乃森さんは隣に座つてきた。髪の毛の縛り方といい、仕草といい珊瑚さんと本当に似てる。全くの別人なのに。

「なんで、藤乃森さんはこの道場に？」

「私の実家にも仕来りがあつてね？10歳から通つてるんだ。なんでも初代様の武器を扱えるようになれとか」

「初代様？」

「その話は後でね？私は稽古を再開するから、それじゃ！」

話をはぐらかされてしまった。稽古をしているのは剣術と槍術のようで相当に鍛錬しているのだと今の俺にならわかる。

「俺も自分の稽古に集中しよう」

そう考えて、素振りと居合の動作の稽古を時間ギリギリまでずっと続けていった。



同時刻、戦国。

戦国時代では犬夜叉達が奈落の仕向けた妖怪の群れと戦っていた。数で攻めて来ている為に弥勒は風穴を開き、珊瑚は飛来骨と呼ばれる武器で群れをなぎ払う。

「数が多すぎる！風穴を開き続けるのも限界だ・・・！」

「はあ、はあ・・・もう、これ以上は」

「矢が・・・もうない！」

「みんな、退いてろ！風の・・・傷!!」

一振りで百の敵をなぎ払う妖刀、鉄碎牙。その基本技である風の傷によつて妖怪たちの大半が消滅した。

だが、それでも妖怪達はしつこく楓の村に迫つて来る。犬夜叉達が防衛している箇所を突破されてしまえば村は壊滅してしまうのだ。

「こいつらー！」

「どうやら、この妖怪達は我々を消耗させるためにあてがわれたもの
ようですな!」

「っ……!こんな時に彼がいたら」

「でやああ!っ居ねえ奴の事を言っても仕方ねえだろ!?かごめ!」

「オラがしつかりせねば、狐火!!」

七宝も犬夜叉達の援護をするが、ほとんど意味を成さない。こんな
時に式神使いの彼がいればと思ってしまうのも無理はない。

式神によつて自然の加護を受けた戦いでは、一人一人が一騎当千の
強者のように戦う事が出来た。風の式神によつて動きの鈍さが軽減
され、水の式神において傷が回復し、炎の式神によつて消滅と弱体化
を可能にし、光の式神においては護りの加護を分け与えられた。

それ程までに自然の加護というものは心強い。だが、真嗣が現代に
帰ってしまった今、それを受けることは出来ない。

そんな時、一本の矢と共に何か空から飛来してきた。妖怪達はそ
れを恐れるかのように退散していつてしまった。

「破魔の矢……桔梗か?」

「犬夜叉……」

「なんじゃ?これは?」

「七宝、どうしました?」

「何か、刀のようなものが地面に突き刺さっておるんじゃ」

「確かに古そうだけど、確かに刀だね」

七宝が指摘した場所には確かに少し古びた刀が突き刺さっていた。
装飾された形から宝刀とも言えるだろう。

「なんでえ、ただの古びた刀じゃねえか」

鉄碎牙の変化を解き刀の姿に戻すと鞘に収め、古びた宝刀に近づく
とその柄を握り、犬夜叉は剣を抜こうとした。

「おわっ!」

「犬夜叉!」

握った瞬間に刀から弾かれてしまったのだ。まるで妖怪が犬夜叉
の鉄碎牙に触れた時に発動する結界のように。

「どうやら、刀自体に結界があるようですな……私でも触れられない

くらいの強い物のようです」

「法師様でも?」

「恐らくは持ち主を選ぶ刀なのでしょう。む?これは・・・五色!?」

「五色じゃと?」

「んだよ、五色つてのは?」

「五色とは色彩による、地水火風空を表したものです。それぞれの性質によって世界が回っている事を意味しているのです。しかもこれは刀自体が五色そのもの、地水火風空を鎮められる者でなければ扱えません」

「なるほどね。それを鎮めることの出来る人間じゃないと無理って事なんだ」

弥勒は法師としての知識から、この刀が陰陽五行、地水火風空の加護を受けている事を見抜いた。

それだけに、妖怪や法師としての力があまり強いとは言えない自分では扱えないのだ。どうやって引き抜くか思案していると、かごめが刀に近づいていく。

「かごめ?」

「なんだか、刀が私を呼んでいるみたい」

かごめが近づく度に刀が脈動する。まるで自分を引き抜いてくれと言わんばかりに。かごめは柄を両手で握り引き抜くと尻餅をついてしまった。

「痛た・・・あ、刀が抜けた」

「かごめ様は桔梗様と同じ浄化の力を持っておりますからな、刀も認め・・・なっ!」

「かごめ、その刀」

「鋒が」

「折れてる?」

折れていてもあれだけの力があつたのが驚きだ。皆が夢中になっていると空から三つ目を牛が降りてくる。

「刀々斉様?」

「なんじゃと?」

刀々斎、犬夜叉の持つ鉄砕牙を鍛えた刀鍛冶の妖怪である。彼の目はかごめが握っている刀に注がれていた。

「かごめ?・・・随分と懐かしいモンを持ってんなあ。その刀どこで見つけたんだ?」

「え?」

「そいつは五色五行刃。このワシが人間に初めて打ってやった刀よ」

「なんだと!?人間に打ってやった刀!」

刀々斎から衝撃的な言葉を受ける。今、かごめが手にしている刀の名称と人間に対して制作した刀だという事実を明らかにされたからだ。

「どういう事だ!?刀々斎のジジイ!」

「まあ、先ずは話を聞け。その五色五行刃はな、式神を扱う者や巫女に對して作った物なんだよ。最も使いこなせた奴は片手で数えられる程しか居なかったけどな」

吠える犬夜叉に對し、刀々斎は飄々とした様子でそれを受け流しつつ、話を進めた。

「依頼してきたのは一人の巫女だったんだがな、五色の柄巻きと四神の属性を持った物を使ってひと振りの刀を作ってくれと。そうして出来たのが五色五行刃ってな訳だ。こいつを作るのにワシでも三ヶ月を費やした程だ」

「三ヶ月も?」

「青龍水、玄武水、白虎土、朱雀炎といった物まで持ち込んできたからな」

「それで出来たのが、この刀だったて訳ね」

「ん、なんだ?そいつ、鋒が折れちまつてるじゃねえか」

五色五行刃を見て、少し落胆したような様子で見定めていた。それに反してかごめが話しかける。

「直せないの?」

「繋ぎがあれば直せねえ事もねえが、その繋ぎになる物がねえなら直せねえな・・・。仮に直ったとしても自然の式神を使える奴はいねえし、扱えるとしたらかごめ位のもんだろ」

刀々斉自身も残念そうに話している。やはり自分の作った刀に愛情があるのだろうか。

「そっか……」

「とりあえずそれはおめえさん達が持っていな。繋ぎが手に入ったら鍛え直してやる」

それだけを言い残すと刀々斉は帰って行ってしまった。式神使用と聞いて、皆が思い浮かぶのはもう一人の仲間の事だった。

「アイツの為の刀……かもな」

「そうね、でも……」

「あやつには此処に来るための繋がりが無い」

「そうだね……」

「もどかしいのう。アイツの為の物が出てくるのに本人がおらんとは」

戦いも終えた一行は楓の村へと帰宅を早める。疲れもある状態のために早めに休もうと、かごめに提案されたのだ。

そして、皆が骨喰いの井戸の前に集まる。もう一度、戻ってきて欲しいという願いを込めて。

再び戦国へ、旅の共の名は珊瑚!?

道場に通ってから早、数ヶ月。この所、式神使い用の稽古が終わると藤乃森さんと稽古するようになった。

お互いに剣術での実戦用の稽古だ。藤乃森さんは技術面もあるけど押し込んでいくタイプ、逆に俺は見切りと受け流しを使うタイプの剣術を使う。

「このおおー!」

「うっ!?しまった、受け損ねた!うわあ!」

受け流しが間に合わず、そのまま押し込まれた俺は道場の壁に激突してしまった。

少し背中が痛かったが、なんとか動けないほどじゃなかった。

「ちよつと、大丈夫!?受け流されてたから、つい」

「だ、大丈夫。受け損なつたけど、大した事ないから」

竹刀を支えにして立ち上がるがこれ以上の稽古は危険だという判断をして、帰宅することにした。

「そう。それじゃ、明日ゼミでね?」

「うん、じゃあ明日!」

◇

帰宅した枢木神社の境内は夜になると誰もいない。だからこそ、鍛錬の場所になる。竹刀を取り出し、身体を温める準備運動をした後に素振りを始める。

同じ動作をずっとし続ける。素振りは忍耐と体力、そして集中力を養うための訓練だ。

師範からは稽古の後は千本の素振りをしろと言われているため、日課になるまで続けた。

二百辺りから汗が滝のように流れ、腕の感覚が無くなってくる。それでも続けていく。

「はあ、8000・・・はあ、801!802!」

素振りを繰り返していると竹刀を握りこんだ掌から血がにじみ出てくる。それは稽古中に出来た血豆が潰れたものだった。

それでも、素振りを止めるつもりはない。規定回数を満たすかそれ以上でなければならぬからだ。

「999・・・!1000!はあ・・・はあ!」

手から血が滲んだ竹刀が滑り落ちる、未だにこれだけはなれない。鍛錬している証なのだが、手からは限界だと知らせる震えと痛みが来る。

「っ・・・手当して寝よう」

今夜はさほど眠れない事を覚悟しながら就寝についた。明日は普通に大学へ行かなくちゃ。



翌日、講義とゼミを終わらせた後、藤乃森さんに声をかけられた。何でも実家にある歴史物を一緒に研究したいとの事だ。

藤乃森さんは電車で大学に通っている。片道30分だが、往復で一時間を考えるとかなりタフな方だ。

「遠慮しないでいいよ。家族には大学の課題を一緒にやるって言うってあるから」

「ああ、うん・・・お邪魔します。何処に収められてるの?」

「こっちの離れよ。何でも初代様が使っていた武器の片割れらしいんだけど」

そう言いながら、藤乃森さんは嚴重で重そうな扉を開ける。そこにはブルーメランを半分に割ったような物が祀られており、俺には懐かしく、見覚えのあるものだった。

「(これ、飛来骨の片割れだ。現代にまで残っていたなんて)」

「なんでも、飛来骨って言うらしいよ?初代様はこれを使って妖怪退治をしていたとかって、お婆ちゃんから聞いたんだ」

「(きつとそれ・・・珊瑚さんだ)」

「私の名前にも意味があるのかな」

そうだ、ずっと苗字で読んでいたから気にならなかったけど、藤乃森さんの名前を知らなかった。

「ねえ、藤乃森さん。藤乃森さんの名前って？」

「そういえば教えてなかったね。フルネームは藤乃森 珊瑚っていうんだ」

「!!」

なんとという奇縁なのだろうか、戦国の世で恋した相手と全く同じ名前の女性が身近にいたなんて。それなら仕草などが似ていることも納得がいく。

「なんでも、私の家系では長女が産まれたら代々、珊瑚の名前を継承するんだって。私がこの家の長女だから、この名前なんだ」

「そうだったんだ・・・」

二人は一緒に飛来骨へと近づいていく。掴み手の飾りはボロボロだが、飛来骨自身は手入れされているのか、さほど古びているような状態じゃない。

「(珊瑚さん・・・)」

未だに引きずっている恋、初めて心から恋した人だった。あそこまですぐで異性を意識して恋したことはなかっただろう。

初恋というものは成就しないという考えが強い。でも、その通りだった。相手は戦国時代に生きている女性、自分はその未来である現代に生きている人間。叶うはずがない恋だ。

だが、その恋した相手には隣にいる相手がいた。それを見たくなくて飛び出したのに変わらぬ姿で接してくれた。

あの時はまだまだ自分が子供だった。今でも同じ状態になれば逃げ出さないのでかと言われれば逃げ出してしまおうだろう。それほど自分は強い人間じゃない。

「どうしたの？」

「え？ああ、何でもないよ」

藤乃森さんが声をかけてきて現実に引き戻される。どうしても吹っ切れないのなら己の中に留めておくしかない。そう考え、改めて

飛来骨を見る。

「不思議だね。なぜか、これを見てると強くなれる気がして・・・」

「うん、それ・・・分かる気がするよ」

そう言いながら飛来骨に触れた瞬間、光が溢れ出し藤乃森が飲み込まれ始める。

「な、何これ!? 吸い込まれる! 助けて!」

「藤乃森さん!!」

腕を掴んで引つ張り出そうとするが、全くビクともしない。むしろ自分まで取り込まれてしまった。身体の全てが取り込まれるとどこまでも落下していくような感覚に支配される。

「きやあああああああああ!」

「うわあああああああああ!」

落ちつつも真嗣はどこかで懐かしさを感じていた。どこまでも落ちていくこの感覚に。

◇

某時刻・戦国

一行は奈落が復活した原因を考えていた。犬夜叉は前回の襲撃してきた妖怪から確かに奈落の匂いを嗅ぎとったと言った。

「もしかしたら、何処かで回復するのを待っていたんだろうね」

「厄介な事に奈落には結界がありますからな、それも間違っではいけません」

「四魂の玉も消えておらぬからのう・・・嫌な予感当たってしまったんじゃない」

四魂の玉とは欲望に忠実な人間や妖怪などが狙うもので、己の力を高めることが出来る。現在はかけらとなって全国に飛び散っており、一行はそのうちの二つを所持している。

「けっ! 奈落が復活したってんなら何度も倒す! それだけだ!」

「犬夜叉らしいわね」

この一行は復活した奈落との因縁が強い。犬夜叉は桔梗との縁、かごめは四魂の玉、弥勒は自身の呪いである風穴、珊瑚は囚われた弟の琥珀といったように。

「おお、皆そろっておるな」

「んだよ、楓婆。何かあったのか?」

「皆に頼みたい事があってな。枢木の里は覚えておるか?」

「枢木の里って・・・入口が封印されていた里よね?今はもう解放されて交流が出来てるけど」

「さよう、その里に通ずる鳳凰山の麓の村で大変な事が起こったそう
だ」

「大変なこと?」

かごめが首を軽く傾げて聞き返す。楓は頷くと再び言葉を発した。

「うむ、何でも協力的な妖怪が現れたそうだ。村の者達は捉えようとしたそうだが、出来ずにいるというでな」

「もしかしたら四魂のかけらを使ってるのかしら?」

「そうだとしたらマズイですな。一刻も早く参りましょう」

「そうだな!」

「急がないとね」

「オラも行くぞ!」

かごめは犬夜叉におぶさり、弥勒と珊瑚、七宝は変化した雲母に乗って村へと向かっていった。それを見届けた楓は自分の仕事をしようとした時、村の外れの森から光を見た。

「あれは?」



村外れの森では男女二人が草むらの上に倒れていた。男の方は目を覚ますと周りを見渡した。

「ここ・・・は?この風景・・・もしかして戦国時代に!」

その正体は真嗣だった。本人としてはタイムスリップしてきた自覚は薄い。以前はウツギという要因があったのだが、今回はそうでは

ない。

「なんだか、身体感じが変だ。妙に軽い。はっ!? そうだ、藤乃森さん！」

隣に視線を移すと藤乃森が倒れていた。その格好は現代の服のままだが、姿が若干若い。

「藤乃森さん、藤乃森さん! しっかりして!」

「ん・・・う・・・真嗣・・・くん?」

「良かった。気が付いて」

「ねえ・・・ここは何処?」

「落ち着いて聞いてね? ここは現代じゃないよ」

「え? じゃあ、何処なの!?!」

「ここは恐らく、戦国時代だよ」

戦国時代と聞いて藤乃森は驚愕した。いきなり現代から戦国時代に跳ばされたとあつては驚きしかないだろう。

「せ、戦国時代って・・・初代様が生きていた時代!? 私達・・・タイムスリップしちゃったの!?! でも、なんで真嗣くんはそんなに冷静なのよ!?!」

「言つてなかったけど、俺は中学生の時に一回、戦国時代に来ちゃった事があるから・・・ね」

「な、何それ!?!」

「おそらく此処は・・・楓の村の外れにある森・・・一度、楓の村に・・・!?!」

『人間の娘を寄こせ、喰わせろおお!!』

目的地を伝える前に下級妖怪が二人の前に現れた。どうやら藤乃森を狙っているらしく唾液をダラダラと垂れ流している。

「きやあああ! な、何よあの化物!?!」

「あれは妖怪だよ。この時代は妖怪も生きていたからね」

「よ、妖怪!?!」

戦国時代に跳んだ事を確認する為に式神を発動させる。現代と比べて霊力も妖力も満ちており、自然が溢れ返っているこの時代では式神の力が現代と比べて強い。

「(やっぱり、戦国時代に来たんだ。現代で使うよりも式神の質が高い)」

『娘を寄こせええええ!!』

突進してくる妖怪を見据え、式神の属性を頭の中で選択する。相手は虫型の妖怪だ、それならばと掌に自然の気を集中させる。

「揺らめく炎よ・・・怒りの刃となり貫け！」

獅子の姿をした炎は突進してきた妖怪に噛み付くように包むと火柱を上げた。断末魔を上げる前に灰となって消えた。

「ふう・・・大丈夫？藤乃森さん」

「な、なんで・・・あんな化物を倒せたの・・・？アンタも化物なんじゃ!?!」

「あ、ごめん・・・いろんな事隠してて」

「近づかないでよ！化け物！」

「っ・・・」

藤乃森は混乱の極みに達していた。無理もない、いきなり戦国時代に飛ばされた上に妖怪が出てきて、その妖怪を真嗣が不思議な力で焼き払ってしまったのだから。

「藤乃森さん、ここは危険だから着いてきて。その後で幾らでも責めて良いから」

「っ、わかった」

警戒を解かないまま藤乃森は真嗣の後を着いて行く。途中、妖怪が現れたりしたが真嗣が撃退し、楓の村までたどり着く事が出来た。

「すみません、楓様はいらっしゃいますか？」

村人に話しかけると少しだけ怪訝な顔をしたが、村人はすんなり答えた。

「楓様なら長の家にいるはずだ。さっさと行きなよ」

「ありがとうございます」

言われた通り、長の家へと向かっていく。どうやらタイミングが良かったらしく、楓が前から歩いてきた。

「ん？お主は・・・まさか、真嗣か!?!」

「久しぶり、楓ばあちゃん」

「本当に久しいのう、実に五ヶ月振りか？」

「化け物、このお婆さんは？」

藤乃森は真嗣を名前で呼ばず、楓の事を聞いてきた。真嗣は気にした様子はなく紹介を始める。

「この人は村の長で巫女でもある、楓ばあちゃんだよ。妖怪にも詳しいんだ」

「む？この娘は？」

「一緒にこの世界に来ちゃったんだ。だから、ここまで来たんだけど」

「ふむ、かごめと同じか。ならば落ち着くまでこの村に居るといい」

「そうします・・・」

「お主、名は？」

「藤乃森です・・・」

「藤乃森か。そう、警戒することはない。この村は大丈夫じゃ」

「はい・・・」

少しは落ち着いたが、藤乃森はどうしても警戒が解く事ができなかった。見知らぬ世界に来てしまい、知り合いも、友人も、家族も居ないのだから。三時間程、時間が経つと楓が何かを感じ取って立ち上がった。

「どうやら、みんな帰ってきたようじゃな。ワシが出迎えた後に声をかける故、その後に出てくると良いぞ」

「え？ああ、うん」



犬夜叉達が村に戻って、楓の家に向かってくるのを見つけると楓は一行を出迎えた。

「おお、みんな。帰ってきたな」

「楓お婆ちゃん！」

「なんだ、出迎えなんて珍しいじゃねえか。楓婆」

「たまには、な。それで妖怪は倒したのか？」

「ええ、いささか手こずりましたが」

「鎧を身につけていたものね」

「全くじゃ」

家に到着すると楓は家の前で待つように言い。跳んできた二人に声をかける。

「二人共、出てきて良いぞ」

「!行こう・・・」

「うん」

真嗣と藤乃森は簾を潜ると、外に出た。楓は少しだけ笑みを浮かべながら一行の顔を見る。

「みんな、懐かしい人に会えるぞ」

「あ?懐かしいって、どういう・・・!おめえ・・・!」

「どうしたの?犬夜叉・・・!あ・・・!」

「二人共、一体何が?・・・っな!」

「なんじゃ、なんじゃ?・・・ああっ!」

「どうしたのさ?一体・・・っ!アンタ・・・!」

「みんな、久しぶり・・・!元気だった?」

真嗣の顔を見た犬夜叉一行は驚きを隠せなかった。かつての仲間と再び再会することが出来たのだから。

「真嗣じゃねえか!!」

「真嗣くん!久しぶりじゃない!!」

「どうやら、元氣そうだなによりですな・・・!」

「真嗣!久しぶりのう!会いたかったぞ!!」

「本当に久しぶりだね。まさか、また会えるなんて!」

犬夜叉一行に笑顔が溢れた。犬夜叉は肩に手を回し、悪友がじゃれあうような格好になっており、かごめは笑顔でそれを見ていて、弥勒と珊瑚も笑みを浮かべている。

「俺もみんなと会いたかったよ」

「え?俺?真嗣くん、自分を僕って言ってなかった?」

「え？だって俺、もう19歳だよ？」

「はあ？何を言ってるやがる、俺達と出会った時と変わってねぇじゃねえか」

「え・・・」

真嗣はそれを聞いて、かごめにある物がなにか頼み込んだ。

「かごめさん、鏡持ってない？」

「鏡？あるわよ。少し待って」

かごめは手鏡をリュックから取り出すと真嗣に渡した。それを使って自分の顔を映し出すと、今度は真嗣が驚きの声を上げた。

「な・・・えええええ！？これ・・・16歳の時の俺の姿だー！！」

「なんと!？」

「どういう事なんだ!？これ?」

「うーん、骨喰いの井戸の原理と同じじゃないかしら?」

「それはつまり、こっちに跳ばされてきた影響で若返ってしまったって事?」

「それしか考えられないわ」

驚愕する真嗣をよそに、かごめは冷静な答えを口にする。何度もタイムスリップしているので慣れてしまっているのだろう。

「あの・・・この人達は?」

「あ・・・ごめん。この人達が、この世界で一緒に旅をした仲間だよ」

「へ、へえ・・・」

話に割り込んだのが藤乃森であった。犬夜叉達の事を見て驚かないのは、妖怪のインパクトが大きすぎて、感覚が麻痺してしまっているのだろう。

「真嗣くん、この子は?」

「俺と同じく跳ばされてきちゃった現代人、名前は藤乃森さん」

「よろしく」

「よろしくね、私は日暮かごめ。で・・・こっちが犬夜叉。法師が弥勒様、その隣にいるのが珊瑚ちゃん、この子が七宝ちゃん」

「よろしくな」

「よろしくお願ひします」

「よろしく頼むぞ」

「よろしくね」

「よろしく・・・って。珊瑚・・・さん!?もしかして初代様?」

「え?そういえば・・・藤乃森さんって珊瑚ちゃんにすっごく似てるわ」
かごめは珊瑚と藤乃森を見比べて、思ったことを口にしていった。そ

こへ弥勒が藤乃森の目の前に立ち、手を握りながら話しかけてきた。

「珊瑚に似た娘さん。私の子を産んでは下さらんか?」

「!?いきなり何言ってるのよ!このヘンタイ!」

「ぐぼっ!」

藤乃森は平手打ちではなく、グーパンチで弥勒を殴り飛ばしていた。それを見ていた珊瑚以外の全員が呆れ顔をしている。

「本当に懲りねえやつ」

「全くじやのう・・・」

「アハハ・・・」

「懐かしいなあ、この流れ」

それをよそに珊瑚は藤乃森に近づいてきた。二人が並ぶとどつちがどつちなのか、分からなくなる程に似過ぎている。

「あんた、藤乃森・・・といったよね」

「え?あ・・・は、はい」

珊瑚を目の前にして藤乃森は緊張と同時に冷静さを取り戻していた。無理もないだろう、憧れになりつつある相手と出会えたのだから。

「あたしの事、初代様って言ってたけど、どういう事なんだ?」

「え・・・そ、それは」

「恐らく、それは藤乃森が珊瑚、お主の生まれ変わりか、子孫であるのかもしれぬな」

「何だっ!?」

楓が考察を口にすると同時に珊瑚が驚きを隠せない。何故なら自分の子孫が生まれ変わりの相手が目の前にいるのだから。

「実は私の名前も珊瑚・・・なんです。私の家では長女、つまり最初の女の子が生まれたら珊瑚の名を付けられるんです」

「なるほどね・・・桔梗とかごめちゃんと同じようなものか」

「それと、家では飛来骨という武器を祀っているんです。それが妖怪退治をしていた初代様との繋がりだと」

「飛来骨をか・・・ますます気になってくるね」

「落ち着いたらちゃんとお話しします」

「そうだね。それよりも・・・本当に私と変わらないね？髪が波打っているくらいかな？」

珊瑚と藤乃森が並ぶと本当に変わらない。だが、そこへ楓が問題点を指摘してきた。

「しかし、ややこしい事になったの？二人が同じ名では、どちらかわからなくなってしまう」

「確かに、そうですね。それなら楓お婆さんが、この戦国での私の名付け親になってくれますか？」

「ワシが、か？」

「はい！」

「ふむ、そうか。ならば少しだけ刻をもらえぬか？名を考えるからかう」

「分かりました。お願いしますね」

「うむ」

そういつて楓は自分の自宅の中へと入っていった。そこへかごめが手鏡を手に話しかけてくる。

「藤乃森さん。もしかして・・・真嗣くんと同じ年？」

「え？ああ・・・うん、そうだけど」

「やつぱり、はい・・・これ」

「鏡？え・・・ええええ！？私も若返ってる!?これ16歳の時の私だ！」
「気づいてなかったんだ・・・」

かごめは呆れながらも、二人の変化に驚いていた。そこへ七宝が声をかけてきた。

「のう、かごめ。オラもうへトへトじゃ」

「そうね、積もる話は楓おばあちゃんの家の中でしょう！」



家の中に入り、真嗣と藤乃森が現代では大学生をしている事、飛来骨が祀られていることなどを話した。途中でかごめが大学生をしていたのなら勉強を教えて欲しいと二人に言ったのは言うまでもない。藤乃森も戦国に突然来てしまった不安などいつの間にか消えていた。この人達は信用できると。

「藤乃森よ。お主の名が決まったぞ。お主の名は『彩水（あやな）』じゃ」

「彩水・・・ですか？」

「うむ、珊瑚は海に関するであろう？水に関する名であれば珊瑚との繋がりがあると思うてな」

「ありがとう！楓お婆さん！」

「なんのなんの、これくらいは構わぬて」

「じゃあ、今からは彩水だね。よろしくね？彩水ちゃん」

「うん、珊瑚・・・ちゃん」

やはり自分が名前にしたので呼びづらくあるのだろう。自分で自分の名を呼んでいるようなものなのだから。

「少しずつ慣れていけばいいさ」

「うん」

同じ姿、同じ年齢、生まれ変わりと前世との邂逅はかごめにとっても新鮮だった。

「まさか、藤乃森さん・・・ううん、彩水ちゃんが珊瑚ちゃんの生まれ変わりだったなんて」

「まるで、かごめ様と桔梗様のようですね」

「うん、経緯は全然違うけどね」

「でも、本当に二人はソックリじやのう？名前が違ってなければ分からんぞ」

「そうか？」

その夜は再会と歓迎会を兼ねた宴となった。色々と語り合い、交流を深めながらの夕食はとても楽しいものとなり、夜は更けていったの

だ
っ
た。
。

彩水と珊瑚の特訓

戦国時代へと飛ばされてから数日、真嗣と彩水は犬夜叉達や楓の手助けもあって新しい生活にも慣れてきた。

「つと、この薪を運んでおくよ」

「おう、悪いな」

犬夜叉が鉄砕牙で割った薪を真嗣が運んでいる。現代とは違い戦国時代では自分の出来る事をやらなければならぬ。

かごめは料理を担当し、珊瑚と彩水は小川で洗濯、弥勒と七宝は山菜取りなどを行っていた。

昼食の時間となり、全員が集まる。昼食は質素だが時代からすれば、かなりの豪華なメニューだろう。

「そうだ！ね！ね！真嗣くん、勉強してもらえない!?今度、学期末のテストがあつて！」

「数学？それとも国語？」

「数学でお願い！真嗣くんと彩水ちゃんの勉強の教え方、すごく解りやすいから、お願い！」

両手を合わせてお願いしますの格好をしてくるかごめさん。中学校の勉強は基礎は覚えるまでやっていたし、なんとかなるだろう。

「わかったよ。彩水さんもお願ひ」

「任せておいて！」

「おめえら、かごめに何を教えてんだ？あの訳の解らねえ本で」

「かごめさんに勉強を教えるだけだよ」

「そうそう、かごめちゃんは試験があるからね」

「妖怪の昇段試験と同じなのか？」

「似たようなものだよ」

七宝の質問に真嗣は答えつつ、夕食を口にして飲み込む。夕食後、勉強機の代わりになる台を準備する。

今回は国語が彩水で、数学が真嗣だ。他にも英語や社会、理科などもあるが、元々かごめの学力は学年30位以内に入る位のものなので、コツさえ教えれば理解が早かった。

戦国時代との行き来で勉強する時間が少なくなってしまった。それゆえに学力が下がってしまったのだ。

だからこそ、真嗣と彩水は少ない日数で効率よく記憶ができ、予習復習が出来るかのスケジュールなどを考え、かごめの勉強に協力している。

「ありがとう！二人のおかげで、なんとか試験もクリアできそう」

「かごめちゃんは勉強できる時間がなかっただけでしょ？元々、学力は高い方みたいだから」

「覚えが早いしね。かごめさんは中学三年生だし、高校受験もあるでしょ？それに備えての勉強も教えるから」

「本当にありがとう！二人には感謝しても感謝しきれない！」

感動で嬉し涙を流しながらお礼を言うかごめ。真嗣がかごめをさん付けしているのは肉体が若返った事もあるが、以前と同じ呼び方でいい？とかごめが聞いてきたのが発端であった。

本来なら現代において年上になっている真嗣を君付けで呼ぶのは失礼かな？と考えたが、お互いに構わないと合意の上で納得したのだ。

此処は戦国時代、15歳と16歳の年齢差など無いにも等しい。だからこそ、気軽な関係も築きやすい。

「じゃあ、少し休憩したら数学だね。それから予想用のテストも作っておいたから、数学が終わった後にテストするよ」

「うん！」



真嗣とかごめを見ていて面白くないのが犬夜叉だ。仲が良く見えるのでヤキモチに近いのだが、彩水と共に学問を教えていると言われてしまい、渋々納得している。

「けっ、やっぱ面白くねえ」

「そう言うな、犬夜叉。かごめ様は自分の国の学問をあの二人から学

んでいるのだ。試験とやらのためにな」

「わかってんだよ。けどな」

「邪魔する訳にいかないだろう？楽しそうに見えて、かごめちゃんは真剣に学問に取り組んでるだから」

「う……」

弥勒と珊瑚に戒められ、バツが悪そうになる犬夜叉。それでもやはり男としては自分の近くにかごめが居て欲しいと思うのだろう。

「相変わらずガキじやのう……ふげっ!？」

「七宝、お前は一言多いんだよ!」

犬夜叉からのゲンコツを受けて、七宝は泣き出してかごめに声をかけた。

「うわああ!かごめー!」

「!あーもう!犬夜叉!おすわり!!」

かごめの言葉に犬夜叉が身に付けている念珠が光り始め、犬夜叉を下へと引っ張る。

「ぎゃふっ!?!」

思い切り犬夜叉は下に叩きつけられ、彩水は驚き、真嗣はこれもまた懐かしいといった表情で見っていた。

「二人共、テストを続けて?」

「あ、うん」

「わ、わかったわ」

気にせずに模擬テストを再開し、採点すると国語が85、数学が94点だった。満点が目標ではあったが、採点した二人からケアレスマスがあったと指摘される。

「高得点ではあるけど、満点を取れるようにしないとね」

「うん、真嗣くんの言う通り」

「厳しいわね、二人共。だけど、似たような問題を続けてて大丈夫なのかあ……」

かごめの不安は最もだろう。何故なら基本となる部分の反復する復習と成果を見るテストしか行っていないのだから。

「まずは基礎学力を固めないと。基礎がしっかりすればどんな問題が

出てきても大丈夫なはずよ」

「先へ先へ進む事も大切だけど、勉強だけは基礎を固めてからじゃないと問題は解けないからね？」

「う．．．おっしやる通りです」

流石は大学生をしていただけであって、かごめの勉強に対する不安を二人は的確に見抜いてきた。

勉強が遅れてしまっている今は基礎を固めることが大切と言われてしまったのだ。試験まではまだ、学期末のテストまで三ヶ月近くある。学力を追いつかせ、高校受験に間に合わせる事は十分可能だ。

「それじゃあ、今日の勉強は此処まで！お疲れ様、かごめちゃん」

「うー．．．！自宅で勉強するよりも捗るなんて、家庭教師が二人だからかな？」

かごめは身体を伸ばしつつ、勉強で凝り固まった身体をほぐし始める。教えていた二人も同じで身体を伸ばしている。

「そんな事ないよ。明日は暗記物の方をやるからね？」

「はい」

そんなこんなで、かごめの勉強時間は終わった。あまりやりすぎても身につかない。程良く息抜きも大切なのだ。

勉強を終わらせた後、彩水は珊瑚の所へと向かっていた。一人で訓練しているというので丁度いいと考えた。

「珊瑚．．．ちゃん！」

「ん？ああ．．．彩水ちゃんか。どうしたのさ？」

「あのね。私を鍛えて欲しいの」

「え？鍛えるって．．．戦えるように？」

彩水は頷くと珊瑚に自分を鍛えて欲しい理由を話し始める。

「うん、このままだと何も出来ないままだから。それに、ね。もし、帰れた時に初代様と一緒に戦えたなんて伝えられるじゃない！」

「変だね、アンタは．．．それじゃ、私の故郷で鍛えてあげるよ。その前にみんなへ報告しないとね」

そう言うのと戦闘服のまま珊瑚は彩水を伴って、村へと戻り始めた。



「なににい？鍛えるだあ？それでわざわざ珊瑚の故郷に行くのかよ？」
珊瑚からの報告を聞いて、反論したのが犬夜叉だった。戦力が減つてしまう事を考えての反論なのだろう。

「確かに、ただ鍛えるだけならば我々だけでも事足りると思うのだが？」

「私が直々に鍛えたいんだ。それに・・・」

「なんじゃ？」

「私の生まれ変わり、子孫だつてことを詳しく聞きたいというのもある」

珊瑚はどうやら現代での自分はどうか伝えられているのか気になる様子だ。かごめと同じ境遇となったことで好奇心が強くなったのだろう。

「良いんじゃないかしら？しばらくは大丈夫みたいだし」

「かごめ、簡単に言うがよ」

「真嗣くんもフォローしてくれるつて言うし、ね？」

「犬夜叉、此処は二人だけの場を作ってあげようよ」

二人に説得され、犬夜叉がとうとう折れた様子でぶつきらぼうに答える。

「わーったよ。その代わり、しつかり鍛えてこいよ？」

「ありがとう、二月で仕上げてくるから行くよ雲母、彩水ちゃん」

「あ、待って！珊瑚ちゃん！」

変化した雲母に乗り、二人は妖怪退治屋の里へと向かっていった。それを見送った後に、かごめが思い出したように手を叩く。

「あ、そうだ！真嗣くんに渡すものがあつたのよ！」

「え？俺に？」

かごめは頷くと大切にしている事が伺えるのが理解できる程、布に包まれた刀を見せた。

それは防衛の際、手に入れた五色五行刃であった。修復はされてい

ないが、意志はまだ生きていることが分かる。

「これは・・・」

それを見て真嗣は刀をずっと見続けていたのだった。

◇

その頃、珊瑚と彩水は雲母を連れて、妖怪退治屋の里を訪れていた。珊瑚は真つ先に自分の父が眠っている墓へと向かった。

「みんな、此処に私の生まれ変わりが来てくれたよ」

退治屋の里は妖怪に襲われ、相打ちになって全滅してしまっており、武器や鎧、住居などは壊れかけているが、そのままの形で残っている。

墓はそのまま土葬した形になっており、道中で摘んだ花が添えられた。

「・・・」

黙祷を終えると珊瑚は彩水に向き直り、自宅であった建物へと向かう。

「それじゃ、先ずは私の家で採寸を調べないとね」

「え？特訓するんじゃない？」

「その前に鎧が必要になるからね。ほら」

「え、あ・・・ちよつと!?!」

腕を引つ張られ、彩水は珊瑚の自宅で珊瑚に身体の隅から隅まで調べられ、珊瑚が着る戦闘服を合わせられた。

「私と変わらないね。それならこれが良いかも」

同じ戦闘服に着替えさせられ鎧も身に付けたが、細部や配色などが違っており、膝当てなどが濃い青色になっている。

「これが、戦国時代の戦闘服・・・思っている以上に軽い」

「それはアンタが鍛えてきたからだよ。かごめちゃんと同じ国の出身だけど、剣や槍をやっていたと言ってたじゃないか」

「あ・・・そうだった」

「さ、今日からすぐに始めるよ？基礎を固めたら武器を選ぶからね」

「よろしくね、珊瑚ちゃん！」

「わかったよ。でも、加減はしないからね！」
こうして、前世と生まれ変わりの存在という二人の特訓が始まった。

復活の五色五行刃

楓の村を離れて、三日。私は今、珊瑚ちゃんが生まれ育ったついでに集落にいる。だけど正直怖い。

楓の村の時は慣れて来たのもあるけど、此処は廃墟も同然に近い。珊瑚ちゃんの生まれ故郷を乏したくはないけど、本音はやっぱ怖い。

「ごめんね、いきなり連れてきちゃって」

「え？あ・・・ううん。謝るのは私の方だよ。この世界に来てから助けてくれた真嗣くんにも謝ってないし、怖くなってるんだもの」

「そうだよ。私の生まれ里だけど・・・こんな事になってたら」

「ごめんなさい・・・」

「謝る事はないよ、キチンと説明していなかった私が悪いんだ」

珊瑚は彩水の心境を見抜いていたのだろう。どんなに明るく振舞っていても内心は恐怖や不安は消えていなかったのだ。

だからこそ特訓して欲しいと言ってきたり、かごめに勉強を教える事で現代を忘れまいと必死だった。

だが、一日一日が過ぎて朝を迎える度に現代ではない事を自覚させられ、それに押しつぶされかかっていたのだろう。

その証拠が彩水の手にあった、その手は血豆だらけで、潰れた跡がある。剣術の訓練を倒れる寸前まで続けていたのだ。

二日目の夜に珊瑚がそれを発見し、手当して休ませた。本人は訓練しないと、などを口癖のように言い続けて何も耳に入らなかったが、疲れから眠ってしまった。

そして今日の朝を迎えたのだった。

「彩水ちゃん」

珊瑚は近くにあった簡素な木刀を投げ渡した。退治屋の里の訓練の為の物だ。それを受け取ると彩水は不思議そうな顔をしている。

「その不安、あたしにぶつけて来なよ。受け止めてあげる」

「な・・・何を言ってるの？私は・・・！」

「隠せて無いからさ。その手の血豆がいい証拠だよ？」

「っ……！何が……」

「っ!？」

「珊瑚ちゃんに、私の……一体何が解るって言うんだあああ!!」
木刀同士がぶつかり合い、二人のぶつかり合いが始まった。彩水の感情に任せた連撃を受け返していく。

「わからないさ!でも、その気持ちを受け止める事は出来るんだよ!」
「上から目線で物事を言わないでよ!いきなり訳も分からず別世界に飛ばされて、友達も家族も何もかも一瞬で無くなったの!!」

「うっ!」

「このおお!」

彩水は連続攻撃を仕掛けながら、一切反撃を許さない。力で押し込んでいく型を身につけた剣術の最大限と言えるだろう。

最大限に感情が込められた彩水の連撃に、珊瑚は手が痺れる感覚を味わった。これ程までに彩水は自分の中に感情を押し込めていたのかと、だが。

「うわああああ!」

泣きながら向かってきた彩水を、その勢いに乗せて珊瑚は彼女を投げ返し、地面に叩きつけた後、抱きしめた。

「あぐっ!?!な……あ……?」

「家族に関しては解るよ。あたしも一瞬で失ったからね」

「え……?」

「あたしも初めは騙されて犬夜叉達と戦った……弟の為に犠牲にしようともした。けど……こうして、みんなが受け止めてくれたんだ。自分の事しか考えてなかったあたしをね」

「珊……瑚……ちゃ……ん……私」

「我慢しないで良いよ、此処にはあたし達しか居ない。思い切り泣いて良いんだよ?」

「わああああああん!あああああ!!」

彩水は珊瑚に縋り付いて大声で泣いた。珊瑚はそれを微笑みながら受け止め続けている、それはかつて自分がかごめにしてもらった時と同じように。

自分も里や家族を失った時こんな風に泣いたのだろう。生まれも時代も違うのに、もう一人の自分とも言える存在が、自分の腕の中で泣いている。珊瑚は不思議な感覚を覚えながらも、彩水が泣き止むのを待った。

「落ち着いた?」

「うん。ごめん・・・着物を汚しちゃって」

「洗濯すれば大丈夫さ。村に戻ったら真嗣にもちやんと謝っておきなよ?」

「わ、解ってるってば!」

慌てた様子を見せたという事はかなり落ち着いたと言えるだろう。泣いて目を真っ赤にしている。

「それじゃ、朝餉にしようか?」

「うん、手伝うね」

二人で準備した朝餉を取りつつ、珊瑚は彩水に聞きたかった事を尋ねる。

「ねえ、彩水ちゃんが私の生まれ変わりだって事は分かったけど・・・子孫ならどうなるんだい?」

「それが、現代で家系図を見た事はあったんだけど、珊瑚ちゃんの名前は出てこないの。繋がりがあるといっただけ」

「(もしかして? 私じゃなく・・・家系は琥珀の方なのか?)」

「珊瑚ちゃん?」

「え? ああ、ごめんね?」

「ううん、私こそごめんね? 珊瑚ちゃんが生まれ育った場所を怖いなんで」

「それは気にしないでいいよ。誰だってこんなの見ればそうなるよ。それより今日から訓練は厳しくいくよ?」

「望むところだよ! でも、その前に・・・」

「何?」

「里の人達に改めてご挨拶したいけど・・・良いかな?」

「! ああ、大丈夫だよ・・・!」

彩水は里の人間が丁重に葬られている場所へ向かう前に、少しだけ

外に出て花を摘むと改めて、葬られている場所へ趣き、一つ一つ丁寧に花を手向け、手を合わせた。

しばらくして黙禱と手合わせを解くと彩水は謝罪の言葉を述べ始めた。

「ごめんなさい・・・怖いなんて言つて」

二人は改めて特訓を始めた。鎖分銅の扱いから始めていき、戦闘服にある仕込み刀による近接戦闘などを一から鍛えた。

まだ心に引っ掛かりはあるが、二人の絆は確かに強くなつていった。

◇

一方で真嗣は、かごめから五色五行刃を受け取っていた。柄を握ると僅かに脈動し、新しい所有者を待ちわびていたのかのようだ。

「刀・・・みたいだけど、鋒が折れてる」

「刀々斎の話じゃ、繋ぎになるもんが必要らしいぜ？」

「ただ、これだけ神聖であると相当な物が必要でしょうな」

「そうね。普通の刀なら、何とかなるかもしれないけど」

多少悩むと犬夜叉は真嗣の腕を掴み立ち上がらせた。それを受けて真嗣は驚きを隠せない。

「え？何？犬夜叉!?!」

「決まってるだろ？刀を直しに行く。刀々斎の所にまで連れて行つてやるよ」

「え、あ・・・ちよつと!?!」

犬夜叉に引っ張られるまま、真嗣は刀々斎の済む火山の近くへと連れて行かれてしまった。取り残された三人は呆然としてしまっている。

「かごめ様?」

「あーもう!犬夜叉つてば、いつつも勝手なんだから!」

「あ・・・」

「弥勒、いかんぞ。この時のかごめは恐ろしいんじゃない」

「確かにそうですね・・・」

かごめを刺激しないよう、二人は二人だけで何とかする事にした。珊瑚も彩水み居ない今、かごめを鎮められる者は誰一人としていないからだ。

しばらくして火山に到着すると、二人は刀々斎が住んでいる巨大な妖魚の骨で出来た住処へと入っていった。

「居るんだろ？刀々斎！」

「おう？なんだ犬夜叉じゃねえか。何か用か？」

「今日は俺じゃねえ、用があるのはコイツの方だ。真嗣、こっちに来いよ」

「よ、よろしくお願いします」

「ん？今度はおめえさんが新しい五色五行刃の持ち主か。どれ見せてみな？」

「はい」

五色五行刃を手渡すと、刀々斎は真剣な面立ちで真嗣を見始めた。

「ふむ、今のコイツには属性が一つ欠けてやがるな」

「え？」

「真嗣っていったな？おめえさんには話してねえが、五色五行刃は五つの属性を持つてんだよ。武神に対応させるためにな。五色のうちの地水火風空、風の属性が今の五色五行刃に入ってねえんだよ」

話を聞いて、刀自体の力が弱いことを知り、驚くと同時に納得もできた。鋒だけが折れているなら修復すればいい。だが、属性そのものを失っているのなら話は別だ。

「なんとか出来ないですか？」

「出来ねえ事はねえが・・・」

「んだよ、とつと言えつてんだ！」

「問題は真嗣、おめえさんが試練を受けるかって事だぜ？」

刀々斎は作業を一旦中断し、真つ直ぐに真嗣を見ている。まるで覚悟を試すかのように。

「試練？」

「鳳凰山にいる大気の精霊の力を貰えなきや、五色五行刃は完全に打ち直せねえ。繋ぎとなる勾玉の樹実も必要になる」

「なんでえ、そんなもん。すぐに取ってこれるじゃねえか」

「そうだなと言っていてえが、犬夜叉。おめえ達が手伝えるのは道中までだぜ？大氣の精霊と出会うのはこの坊主一人だけだ」

「え？」

「試練つてのは式神使いが、欠けた属性を手に入れる事なんだよ。歴代の所有者達の中にはその試練を乗り越えられずに命を散らした事もあった。最も力だけを追い求めた結果だがな？」

「っ……」

命を落とすかもしれない試練、そう聞いて真嗣は息を呑む。だが、五色五行刃は自分を選んでくれたのだ、だからこそ、その意思に応えたい。

「刀々斎さん……俺、その試練に挑むよ」

「ばっかやろう！命を落とすかもしれないねえんだぞ!?!怖くねえのかよ!?!」

「怖いさ！でも……この試練から逃げたら俺はずっと逃げ続けなくちやならない気がするんだよ！それに、怖いつて証明は俺の足にあるよ」

「足？な……!」

真嗣の足は笑い続けていた。それこそ、その場から動きたくないとも言える程の震え方だ。今までは犬夜叉を始めとする仲間がいてくれた。しかし、この試練は一人である大氣の精霊の元へ行かなければならない。

それどころか、力をも手に入れなければならない。命を落とす危険もあると告げられれば、現代の出身である真嗣は恐怖して当たり前なのだ。

「おめえ……」

「それでも、行くよ……途中までみんなで行ってそこからは俺が行くから」

「しようがねえな、一旦戻るぞ？」

「ああ、待ちな。こいつらを持っていけ」

刀々斎から渡されたのは五色五行刃と一本の刀だった。刀の方は

飾りも何もなく、刀の機能性だけを追求したような感じだ。

「あの？これは？」

「影打ちだ。今のオメエさんには十分すぎるやつよ。そいつは守り刀としての力が多少ある。折れた時、また、ここに来たら俺に渡しな。五色五行刃を生まれ変わらせてやる」

「ありがとう、刀々齊さん」

犬夜叉に連れられ、楓の村に戻り試練の話聞いた、かごめ、七宝、弥勒は大声を上げて反対した。

「何を言ってるのよ!?真嗣くん!そんな試練、危険すぎるじゃない!」「そうじゃ!わざわざ五色五行刃を直すためとはいえ、命を粗末にするでない!」

「私も賛成しかねますな、別の方法を考えたほうがいい・・・!」

「みんなが心配してくれる気持ちは嬉しいよ。でも・・・この刀を直さない」と

真嗣の言葉に説得力は無く、逆に火へ油を注いでいるようなものだ。

「あの山の山頂の高さは知ってるでしょ!?!どうしてそこまでするの!?!」

「守りたいからだよ・・・」

「む?」

「守られるだけでいるのは確かにいいのかもしれない・・・でも、それじゃみんなに頼りすぎて、いざ自分でやるべき時に行動できなくなっちゃうのは嫌なんだ!それに、独りで身を守らなきゃいけない時もあるはずだよ」

「真嗣、お前・・・」

意地でも何でもない。自力で動けるようになっておきたい、それが真嗣の目的だった。その第一歩こそが五色五行刃の修復なのだ。力が欲しい訳ではない、己で己を守れるようになっておきたい、この試練はそれを身に付ける最大のチャンスなのだ。

「仕方ないわね・・・途中までは私たちが一緒に行くからね?」

「うん、ありがとう」

雲母が居ない為、二日かけて鳳凰山へたどり着き、山頂を目指す。七宝の術などを頼りに山頂付近まで近づくと風が強く吹き始めた。

「きやあ、風が！」

「う・・・！呼んでる、大氣の精霊が」

「くうう！真嗣、必ず無事に戻ってきなさい！」

「弥勒の言う通りだ！必ず勝ってきやがれ！」

声援を背中に受け、勾玉の樹がある場所へと足を踏み入れる。そこには大氣の精霊が人型となって待っていた。

『五色五行刃・・・この大氣の精霊の力が欲しいのか？』

五色五行刃が僅かに脈動し意思を伝えるが、真嗣がすぐに割り込む。

「違う。五色五行刃に眠る風の力を起こして欲しいだけだ！」

『その願いは我の力を欲する事と変わらぬ。我の力を欲するのならば、我に力を示せ！式神使いよ！』

そう言つて風の精霊は強風を真嗣に叩きつける。だが、全身が何か鋭いカミソリのようなもので切られる感触が現れ始めた。

それは真空の刃、俗称カマイタチと呼ばれる現象を大氣の精霊が使っているのだ。風は精霊にとって見えない刃となり、盾にもなる。

「ここで、膝を折っている訳にはいかない。勝負だ！大氣の精霊！」

『来るがよい、そして我の力を得てみよ！』

刀々斎から預かった刀を鞘から抜いて構えを取る。今の自分が頼れる武器はこれだけ。だが、精霊との戦いでは刀など、ただの鋼も同義だ。

「俺は必ず五色五行刃を復活させてみせる!!」

真嗣の刀と大氣の精霊が作り出した刃がぶつかり合い、二人の戦いが今まさに始まったのであった。

四神の一太刀、炸裂！朱雀の息吹！

「うわああー！」

『ぬん！』

真嗣が振り下ろした刀の一撃が、大気の精霊の持つ刃に受け止められる。影打ちと言われている刀が、大気の精霊との打ち合いに使えた。これには驚きしかなかった。本来、精霊というものは実体を持たない霊体のため、刀では捉える事は出来ない。

影打ちの刀は五色五行刃の一部から打たれた刀だったのだ。見た目ではただの無名な刀でしかないが、この戦いにおいては、どんな名刀よりも頼りになる存在になっていた。

「ふう・・・ふう・・・」

『一体何を望む？確かにお主の心には力を盲信している事も、何かを倒そうとする念も感じられぬ。ならば何を求める？』

「大切な人や仲間を守りたい・・・じゃあ、答えにならないかな？」

『何？』

「俺は人間だからね、感情に勝てない。だけど信念さえ持てれば人は成長できるんだ！たあああ！」

『はっ!!』

真嗣は斬りかかっていくが、大気の前は軽々と真嗣を吹き飛ばしてしまった。あまりの突風で崖から落下しかけ、咄嗟に刀を突き刺し、落下を阻止して這い上がったが武器を失ってしまった。

「武器はない、式神も使えない・・・それでも！」

空手の構えを取り、大気の前と対峙する。命を投げ打つ覚悟はしきれしていない。倒せなくても一撃くらい報いてみせると。

『諦めぬ心、不屈か。だが、足りんぞ！』

「！うわあああ！」

風で岸壁に叩きつけられ、真嗣は意識を徐々に失い始めていった。立ち上がろうとしても力は入らず、瞼が重くなっていく。



「ろ．．．きろ．．．起きろ」

「う．．．誰だ？」

「久しいな？真嗣」

「！う．．．ウツギ!？」

目の前に居るのはウツギ、かつて自分を戦国の地に呼び寄せ、魂を奪おうとした人形であった存在。奈落に式神の力ごと身体を乗っ取られ。最後は魂込めの術によって人間となり、柩木の里に葬られた。「大気の精霊はお前の心を試している。闇雲に戦っても意味はない」
「でも、どうすれば!？」

「今のお前には届かせる為の神具がある?？」

「え?？」

ウツギの隣に一人の巫女が立っていた。長く艶やかな黒髪を水引きと呼ばれるもので結っており、巫女装束に身を包んだその姿は桔梗と同じ雰囲気を漂わせている。

「だ、誰?？」

「やはり、この年若い姿では解らんか．．．。わたしは覚樹だ。お前の中の式神を目覚めさせたあの老女よ」

「え、えええええええ!?!か、かかか覚樹ばあちゃん!？」

「お前からすれば、確かに婆ちゃんと呼ばれても仕方ないが、流石に応えるな」

「え．．．あ．．．だ、だって。それに此処は?？」

どう見ても、桔梗やかごめさんと同年代くらいにしか見えない。これが婚姻前で現役の巫女だった時の覚樹ばあちゃんなのか？

「話が逸れたな、ここはお前の精神の中だ。ウツギの言う通り、大気の精霊との戦いは意志のぶつかり合いだ。お前は相手が精霊というだけで自分が各下だと思いい、心が後退している」

「え．．．だって、俺はもう」

「五色五行刃を使え、あれには鋒に変わる力がある。お前の意思を込めてぶつけろ」

「！分かったよ」

「ではな」

ウツギと若き姿の覚樹は背を向けると同時に姿が希薄になっていく、その姿に真嗣は声をかける。

「覚樹ばあちゃん！ウツギ！二人共、ありがとう！会えて嬉しかったよ」

「・・・ふ」

「そうか。ならば勝て！お前は必ず勝てる。私も久々に会えて嬉しかったぞ」



意識を取り戻すと大気の前霊は何処かへと行こうとしていた。真嗣の様子を見て戦いは終わったと思っただろう。

「待・・・て・・・まだ・・・俺は・・・やれ・・・る！」

『ほう？不屈で向かってくるとはな』

「(五色五行刃、今はこれを使うしかない！)」

鋒の無い五色五行刃を手にして構えると、大気の前霊も再び人型となつて刃を構える。

「(頼るな・・・切り開く事を考えろ・・・相手は前霊。だからこそ自ら挑む！)」

真嗣の一瞬の決心が伝わり、五色五行刃が脈動する。鋒の無い箇所には真っ赤に焼けた鉄のような色をした物が、鋒になった。それと同時にめ込まれている小さな水晶の玉が朱色に染まっていき、五色五行刃が脈動する。

「!?五色五行刃から鳥の鳴き声？」

確かに聞こえたのは鳥の鳴き声だ。それもアカシヨウビンに近いもので、五色五行刃から聞こえてくる。

『むっ?』

「確か、五色五行刃には」



「これは五色五行刃といって、式神使いの為に作られた刀らしいの」「そうなんだ、うわ！重っ！刀なんて初めて持ったからびっくりした」かごめから初めて受け取った時を思い返す。五色と五行、二つの力の他にも力があると言って言っていた。

「この刀にはね・・・さっき言っていた力以外にも四つの力があるらしいの、確か・・・だって」

最後の部分が思い出せない。炎と鳥・・・それから連想できるのは不死鳥、ほかにも思い返していく。

「そうか！この刀の力の一つは！」

思いついた途端に五色五行刃の脈動が早くなっていく。大気 of 精霊は既に攻撃を仕掛けようとしていた。

『はああああ!!』

「！四神一太刀、朱雀の息吹!!」

『なんと!?!』

横薙ぎから発せられた鳥の姿と鳴き声を伴った衝撃波は大気 of 精霊が起こした真空の刃を巻き込み、大気 of 精霊へ向かう。何度も傷つけられようと、倒されようと復活してくるそれは、さながら不死鳥の如く。

『うおおおおお!!?!』

「っ・・・はあ・・・はあ」

気力を持って行かれたのか、真嗣はその場で片膝を着いてしまった。無理もない気絶させられる程の衝撃や真空による切り傷が数え切れないくらい、全身にあるのだから。

真嗣は気づいていないが、強風だった風は穏やかになっており、大気 of 精霊も先程までとは違って殺気がなくなっている。

『お主の心の一撃、しかと受け止めた』

「っ・・・大気 of ... 精霊?」

『五色五行刃に我が力を授けよう。勾玉の樹実を二つ持っていくが良

い』

「二つも?」

『いずれ、必要になる時が来よう』

伝える事を伝えきると大氣の精霊は五色五行刃に宿った。それはあくまでも半身であり、本体が宿った訳ではない。それでも力の差は無く、五色五行刃の柄巻きに色が浮かび上がった。

「戻ら・・・ないと」

真嗣は岸壁に手を添えながら犬夜叉達が待つ場所へと向かっていく。なんとかたどり着いたが、犬夜叉達は真嗣が全身傷だらけなのを見て大声を上げた。

「真嗣くん!?大丈夫!?全身、傷だらけじゃない!」

「おい、真嗣!大丈夫か!」

「やっぱり無茶しおったか!」

「大氣の精霊との戦いとはいえ、七宝の言う通り無茶し過ぎですよ!」

「みんな・・・な・・・ごめ・・・ん」

それだけ言うと真嗣は気を失ってしまった。手には五色五行刃と大氣の精霊が持たせたのだろう、折れた影打ちの刀が握られている。「みんな、つづみの村に行きましょう。そこで休んでから楓の村に帰る方が良いと思うの」

「そうだな、おめえらも休まねえと」

「そうじゃな」

「では、行きましようか」

気絶した真嗣を犬夜叉が担ぎ、鳳凰山を下山する。その途中でウツギと若かりし頃の覚樹が一行を見守っていたのを知る由もなかった。

◇

また、二日かけて楓の村に戻る頃には傷もだいぶ回復し、歩けるようになっていた。途中、妖怪などにも襲われたりしたが、それらを倒し楓の村に帰ってきた。

同時に帰ってくるのを待っていたかのように、刀々斎が楓の村で一行を出迎えた。

「刀々斎さん？」

「おう、真嗣。おめえ……試練を乗り越えちまったんだな。刀を見ればすぐに解るぜ。約束通り五色五行刃を鍛え直してやるから刀を渡しな。影打ちの方もな」

「分かりました」

「なんだ、おめえ。勾玉の樹実まで取って来ちまったのか？こりゃあ、完璧に鍛え直しと打ち直しが容易だぜ」

「取ってこいって言ったの、刀々斎さんでしょ？」

「そうだっけか？まあ、いいや。四日もあれば完全に鍛え直せるぜ、特別に鞘も作っておいてやる」

「ありがとうございます」

「いいって事よ。それじゃあな」

刀々斎は真嗣から五色五行刃、影打ちの刀、勾玉の樹実を受け取ると帰っていった。五色五行刃を完全に直せるのは刀々斎だけなのだ。信頼して待つしかない。

「傷は治ってるし、簡単な鍛錬だけでもしておこうかな。彩水さんだって珊瑚さんに鍛えられてるし」

「お？おめえ修行するのによ？」

珍しく犬夜叉が声をかけてくる。着替えは楓に仕立ててもらった簡素だが色彩が綺麗な着物を着ているが、簡単な鍛錬はできるだろう。

「うん、空手のね」

「空手？なんだそりゃ？」

「あー、解りやすく言うと無手で戦える方法って所かな」

「それなら、そう言えってんだ。で？どこでやるんだ？」

「え？犬夜叉も来るの？」

「あつたりめえだろ？せっかく二人なんだし、組手もできるだろ？」

「それもそうか、じゃあ少し離れた森に行こうか？」

「おう」

犬夜叉と真嗣は村のすぐ近くの森に入り、犬夜叉は鉄砕牙で素振りをし真嗣は身体を解す準備体操をした後に正拳突きを現代で教わった型を構えてから始める。

「はあ．．．はあ．．．999、1000!」

「おめえ、それをずっとやってるのか？汗だくだぞ?」

「はあ．．．はあ．．．まあ、ね」

「拳のキレが普通の人間よりも速え、かごめと同じ国で修行してたのか?」

「修行．．．とは少し違うけど、鍛えてはいたよ。もう、日課になっちゃってるけどね」

犬夜叉は着物の裾から時折見える真嗣の腕を見て、鍛えていた事が嘘ではない事を見抜いていた。

若返ったとはいえど、鍛えていた肉体が戻る事が無かった。仮に戻ったとしても今の真嗣はもう一度戻そうとして鍛え直すだろう。

「まあ、足手まといにはならねえみたいだな」

「犬夜叉、挑発して鉄砕牙の相手をしてもらおうなんて考えなくても大丈夫だよ」

「うぐつ!?そ、そんなんじゃねえよ!」

真嗣は肉体は16歳だが、頭脳と知識は現代の20歳を迎える寸前の19歳だ。ある程度は考えている事が分かかってしまうのだろう。

「じゃあ、組手しようか?あ、式神は使わせてもらうからね?」

「俺も久々に無手で戦うか」

犬夜叉は指を鳴らして、構えを取る。お互いに本気は出すが全力は出さない。あくまで修行なのだから。

「行くぞ!おめえとはいっぺんやり合ってみたかったからな」

「行くよ、犬夜叉!」

犬夜叉が素早く殴りかかってくるが、今の真嗣にはそれが見えている。初めて戦国時代に来た時の自分では完璧に負けていただろう。

「ここだ!」

「何!?!おわっ!」

真嗣は犬夜叉の攻撃の呼吸を見切り、合気道の投げ技を使って犬夜

叉を叩きつけた。叩きつけられはしたが、妖怪にやられるよりは、はるかに威力が弱い。犬夜叉からすればまるで攻撃を受け流された為に幻惑されたのかと思っただろう。

「今のは・・・!?」

「今のは相手の向かってくる力を利用して叩きつけたんだ。力任せに来ればその分、相手へ返す力も強くなるんだよ」

「式神の力じゃねえのか!?!」

「うん、これはただの体術だよ。式神の力は防御にしか使ってない」

犬夜叉の目からしても式神は防御に特化している緑色しか見えていない。だが、真嗣は確かに自分よりもはるかに強い犬夜叉を地面に叩きつけたのだ。

「こんな体術があるんだな、俺にも教えてくれねえか?」

「良いけど、身を守るためにしか使えないよ?」

「構わねえ、頼む!」

「分かった。まずは」

犬夜叉が真嗣に合気道を教わろうと考えたのは、自分が人間になつてしまった時の対処のためであった。相手の力を利用して相手を倒す。これほど魅力的なものはないのだから。

半妖である自分は特定の日に妖力を失ってしまう。そのため、鉄砕牙も使えず身体も傷つきやすい、野盗にも負けてしまうのではと思えるくらいだ。

真嗣が自分に使った体術を身に付ければ多少なりとも身を守る事ができる。そう思つて今の真嗣に教えを請いた。

「犬夜叉、慌てちゃダメだからね?」

「わーってるよ!」

それから二人は夕方になるまで合気道の修行を続けた。体術に關しては飲み込みが早く、犬夜叉は真嗣から教わった合気道の基礎を瞬く間にマスターしてしまった。

「そろそろ帰ろうぜ、真嗣」

「そうだね、お腹も空いたし」

土まみれになりつつも、二人は修行を終えて仲間達の待つ家へと帰

宅していったのだった。

月下に輝く刃

妖怪退治屋の里に来て早一ヶ月二十八日、修行の成果も出てきて、珊瑚にはまだまだ追いついてはいないが、実戦慣れさえすれば大丈夫なほどに技が磨かれてきていた。

「彩水ちゃん、そろそろ休息にしよう？かごめちゃんに学問を教える準備をしてるのは分かるけど、根を詰めるのも良くないよ？」

「あ、うん。そうするよ」

あの日以降、珊瑚と彩水は仲が良くなった。意外にも彩水は料理が得意で、珊瑚の料理の師となり教えていた。

「そうそう、お魚の焼き具合はそのくらいが丁度良いよ」

「なかなか難しいね」

「珊瑚ちゃんは器用だからすぐに慣れるわよ」

こうして二人の絆はより深くなっていた。食事の時には、かごめの学問に対する意欲さや犬夜叉の妨害、弥勒に珊瑚と間違われたと事などを面白可笑しく話していた。

「法師様に間違われたんだ」

「あの時も思いつきり殴ったけどね、失礼しちゃうよ」

「本当に懲りなからね。法師様は」

食事を終えて、片付けをしながら話を進めている。主な話題はやはり弥勒から受けるセクハラだ。だが、それも無理もない、毎回受けていた珊瑚からすれば、もはや呆れている。

「まあ、法師様の話はここまでにして。今日は・・・!?」

「どうしたの？」

「急いで着替えて！妖怪が近づいて来てる！」

「！わかった！」

二人は戦闘服に着替え、防毒面を口元に装着し、外へ出ると小規模の妖怪の群れがこちらへ向かってきていた。

「珊瑚ちゃん！」

彩水は両手で抱えた飛来骨を珊瑚へ投げ渡し、彩水自身は真刀を手

にして外へ出る。

「ありがとう！でも、丁度いいね。彩水ちゃん！実戦経験を積むよ！」

「え、わ・私も!？」

「当然さ。何の為に特訓してきたんだい？私も手伝うから、行くよ！」

「ま、待って！」

妖怪の群れは本能で人間を襲おうとするタイプのものばかりだ。高い知能を持つ妖怪は人型になるらしく、襲ってきている妖怪の中にはいない。

「くらえ！飛来骨!!」

飛来骨が妖怪をなぎ払う中、仕留めきれなかった妖怪が彩水へと向かっていく。それを見た珊瑚は飛来骨を再び投げようとするが、間に合わない。

これが飛来骨の弱点だ。飛来骨は大型であるが故に一度投げてしまえば勢いを付けるのに数秒間のロスが発生してしまう。

「こ、来ないで！」

逃げようとするが、足が竦んで動く事が出来ない。妖怪は好機と言わんばかりに彩水へ食いつこうとした、その時だった。

「うわああああ！」

『ギイヤアアアア!？』

彩水は珊瑚から手渡されていた刀で、妖怪を切り伏せてしまった。そう、彩水の良い点でもあり、弱点でもある火事場力が表立って出てきてしまったのだ。

「ああああ！たああああ!!」

現代においては彩水は動体視力が良く、電車の上り下りを見つめる事で鍛えていた為、妖怪の動きはスローモーションのように見えていたのだ。

だが、珊瑚からすれば、これは周りが見えていないのと同義。かつて初めて自分が出陣した時と全く一緒な状態。

「彩水ちゃん！駄目だ・・・何も耳に入っていない!どうすれば?」

「きゃああ!？」

順調に倒していたように見えていたが、彩水は四方八方から妖怪に

襲われ、家屋に吹き飛ばされてしまった。

何度も何度も吹き飛ばされたりする事は現代の道場や、珊瑚の特訓ともあったが衝撃の度合いが違いすぎている。

「う……ぐ……」

「彩水ちゃん！うっ!?」

彩水へ近づこうとすれば妖怪に取り囲まれ、珊瑚は助けに行く事が出来ない。彩水は頭を左右に振ってなんとか意識を覚醒させたが、武器である刀が折れてしまっている。

「どうしよう……これじゃ珊瑚ちゃんを助けられない!」

吹き飛ばされたおかげか、痛みはあるものの彩水は頭が冷えた様子だ。吹き飛ばされた先の家屋は武器庫のようで、何か無いかと必死に探し続ける。

だが、どれも武器として自分には扱えない物ばかりだった。それでも探し続けるとある場所に嚴重な箱を見つけ出し、その蓋をこじ開けた。

「これって……?」

その武器は三日月のような刃を持っていた。それを手にし仕掛けがあるのかを調べると、隠された突起部分を押し出す事で、三日月、半月、満月と言える段階に刃を伸縮させる事が可能のようだ。

「これは……鎖かな?」

鎖を使うことで敵を薙ぎ払う事も可能なようだ。この武器を手にして珊瑚の援護へと向かう。外では珊瑚が隠し刃や飛来骨を盾にして踏ん張っていた。助け出すために起死回生の一撃を見舞う。

「珊瑚ちゃん！伏せて!!」

「えっ!!」

言われるままに身体を伏せると妖怪達が鋭い刃で切られたかのようになんてが薙ぎ払われている。鎖で速度を殺し、彩水は戻ってきた刃をキャッチした。

「彩水ちゃん!?それは!」

「偶然見つけたの!緊急時だから使わせてもらおうね!」

その刃を手にした彩水は凄まじかった。遠距離では刃を飛来骨の

ように投げ、鎖を振り回してなぎ払い、中距離ではチャクラムのように投げつけ、近距離では刃として使用する。

まるで舞っているかのようで、鮮やかな一撃を加え、珊瑚の邪魔にならないよう戦っている。珊瑚が飛来骨でなぎ払えば、彩水は討ち漏らした部分を倒すという、即席のコンビネーションではありえない位の連携技。

そう、言うなれば何年も共に戦い、背中を預け合ってきた戦友同士とも取れる息のあった二人だ。

最も、彩水は極限状態の集中力を発揮し、珊瑚が彩水のフォローをしている事には変わりはない。

妖怪達を全て倒すと、二人は背中をくっつけ合って座り込んでしまった。

「はあ・・・はあ・・・結構やるね？彩水ちゃ・・・ん」

「はあっ・・・はあ・・・そうでもない・・・よ。珊瑚ちゃん」

息が整った所で雲母も合流してくる。珊瑚は立ち上がると彩水に手を差し出し、彩水も珊瑚の手を握って立ち上がった。

「ふた月の予定だったけど、これなら大丈夫かもね」

「無我夢中だっただけだよ」

「それでもだよ、後は犬夜叉達と一緒に居れば大丈夫だから戻ろう？」

「うん、わかった」

「よし、雲母！楓の村にもどるよー！」

そういうと雲母は大型化し、二人を背に乗せて楓の村の方角へと飛んだ。飛んでいる最中、珊瑚が彩水に声をかける。

「彩水ちゃん、今手にしてるその武器の名前って知ってる？」

「ううん、何かあるの？」

「それは月下刃というんだ」

「月下刃？月の下の刃って事？」

「月すらも切り伏せるという意味を込められて作られたんだ。最も扱いが難しくって使われなかったけどね」

「そうなんだ・・・持ってきてきちゃったけど良かったのかな？」

「大丈夫だよ。大切に使ってくれればね」

「それは、もちろんだよ！」

その言葉を聞いて珊瑚は笑みを深くした。実は月下刃は幼い頃に珊瑚が使うはずの武器だったのだが、扱いが難しく封印され、飛来骨を渡されたのだ。

その生まれ変わりである彩水が手にするとは、誰も思ってもみなかっただろう。こうして愛用の武器を手に入れた彩水だったが、ここから先に苦労や試練が待っているとは思いつかなかったのだ。

最高の鍋料理

戦国での一日は早起きから始まる。今日は真嗣が最初に目が覚めてしまった。かごめや犬夜叉、弥勒に七宝はまだ眠っている。

戦国時代の人間は早寝早起きが当然のはずなのだが、自分が一番最初とは珍しいと苦笑してしまう。

「無理もないよね。さて・・・今日は俺が朝食を作ろうかな」

そう言って真嗣は着物の裾を上げると楓から習った方法で紐を結って落ちないように、固定し台所へと向かう。

外へ出て井戸へ向かい、水を汲むと米を磨ぐ。朝早くから畑仕事をしている村の男性に声をかけられる。

「真嗣様、おはようございます。お早いですね？」

「おはようございます。なんだか目が覚めちゃって」

「それで、朝餉の準備を？男が台所へ立つのは」

「料理は覚えておいて損はないですよ？一人で生活するのなら尚更です」

「これは一本取られましたな！それでは」

「はい」

真嗣は米を磨ぎ終わると台所へ戻り、竈に火を入れ米を炊き始める。現代とは違いタイマーなどはかごめが持参したものを使わせてもらい、楓の村に住んでいる村人から分けもらった野菜などを使って料理をする。

「式神使いっただけで拝まれちゃってるの悪い気がするよ・・・戦国の樞木の里とも交流してるみたいだし」

味噌の作り方は現代で祖母や母に教わっていたので作っておいたものを使う。土の式神の力を使って熟成を早めたのは内緒だ。

まな板の上で包丁の音が小気味良く響き渡る。それを聞いて目を覚ましたのか楓が台所へ入ってきた。

「あ、おはよう。楓ばあちゃん」

「おお、真嗣。男子（おのこ）が料理とは珍しいな？これ全てお主が作ったのか？」

「うん、そうだよ。一番早く目を覚ましちゃったからね。あ、少し味見してみる?」

そういつて真嗣は味噌汁を小さな器によそうと楓に手渡した。興味深そうに味噌汁を見た後に楓は汁を啜った。

「ほう、これは美味しい。出汁は海の物を使ったのか?」

「そうだよ。昆布と鰹節っていう魚を乾燥させて作った物を使ったんだ」

説明した後、真嗣は再び料理を再開する。偶然にも山の幸を取ってきたという村人からそれを分けて貰えた為、朝餉のメニューに加えることにした。

「これは楽しみじゃのう」

「任せて、これでも料理は勉強したんだから」

菜種油を使い、キノコの炒め物を作ると同時に目が覚めて起きてきたのが犬夜叉だ。匂いには人一倍反応するからだろう。

「お?なんだ...?この匂い...美味そうないがしてるじゃねえか」

「あ、犬夜叉。かごめさん達を起こしてきてくれる?もうすぐ朝食だから」

「んあ?お、おう」

寝ぼけ眼だったが、真嗣が朝食の準備をしている光景を見て一気に眠気が吹き飛んでしまった。言われた通りに他のメンバーを起こしに行く。

「ふあゝ...あれ?朝食が出来てる?」

「かごめさん、おはよう」

「あ、おはようって...!この朝ごはん、真嗣くんが作ったの!」

「そうだよ。みんな起きてきたね」

「すぐく美味そうじゃ!朝なのにオラ、腹が減ってきたぞ」

「これ程とは」

「さ、食べよう?」

朝食の合図を済ませ、皆がそれぞれ朝食を口にする。飲み込むと同時に皆が目を見開き、感想を言う。

「う、美味え!」

「ほう、これはこれは」

「本当に美味いぞ！真嗣!!」

「うそ、私負けたかも・・・」

「うむ、これ程とは思わなんだ」

真嗣の作った朝食が絶賛される。だが、真嗣は自分の力とは思っていない。この時代の素材が良すぎるのだ。

現代とは違って、この時代の食材は全てが自然の物、そこへ現代の技術で調理したに過ぎない。現代において天然自然の物が食べられるのは殆ど皆無と言っている。

素材の味を生かした食事、これが美味くないはずがない。戦国の人間からすれば現代の技術を使っているのだから革新的な味付けになっっているだろう。

現代人であるかごめにとってはご馳走といっても過言ではない。身体の隅々にまで、現代では取る事の出来ない栄養素が染み渡っている。

朝食を終えるとかごめが皆に緑茶を入れる。犬夜叉は苦手らしく腕枕をして横になっている。

「真嗣、オラあんなに美味しい朝餉は初めてじゃったぞ！」

「ありがとう、七宝。お昼も俺が作るから」

「ちよつと待って！私も作るわ！」

かごめが勢いよく真嗣に迫る。今まで自分が担当していたもので負けたくないのだろう。

「あ・・・うん。じゃあ俺、鍋料理を作るよ」

そんな会話をしていると外から何か着地したような音が聞こえた。しばらくすると着物姿の珊瑚と彩水が、皆のいる家の中へ入ってきた。

「みんな、ただいま」

「ようやく帰って来れたよ！あれ？どうしたの？みんな」

珊瑚と彩水以外の全員が固まっていた。無理もないだろう、二人は全く同じ柄、配色の着物を着て、髪の手結び方まで鏡写しのようになりなのだ。

「さ、珊瑚が二人おるぞ!？」

「お待ちなさい、私が確かめてみます」

「あ・・・」

この後に起こる流れに真嗣は止めようとしたが、いつの間にか起き上がっていた犬夜叉が視線でやめておけと訴えている。

当然ながら弥勒は珊瑚と彩水に近づき、珊瑚の尻と彩水の太ももを撫で始めた。

「くううううう・・・!」

「うううううう・・・!」

二人は身の毛がよだつような感覚に声を上げてしまう。それと同じ時に二人は拳を構えた。

「ちよつと!」

「この!」

「スケベ法師がああ!」

ドゴツ!という音が聞こえそうで見事なストレートパンチが弥勒にヒットした。弥勒は両頬を腫れ上がらせてノックダウンしたが意識はある状態だ。

「本当に懲りねえ奴」

「だったら止めたほうが良かったんじゃないかな? 犬夜叉」

「けっ、毎回女を追っかけてんだから、たまにはいい薬だろ?」

「それはそうかも。珊瑚ちゃん、彩水ちゃん。お帰りなさい!」

真嗣は弥勒の手当をしつつ、かごめは珊瑚と彩水へ帰宅したことに對する挨拶を返した。

「脅かそうと思って珊瑚ちゃんと同じ格好をしたけど、そんなに分かっていなかった?」

「全然分からなかったわよ、鏡があるのかと思っただくらいだもん」

彩水は髪を解いて分かりやすくする為、サイドテールに近い髪型で髪を結った。慣れてはいないが見分けを良くするために仕方ないと割り切っている。

「私も驚いたからね。本当に鏡に映った自分かと思っただくらいだよ」

女性陣は女性陣で会話が弾んでおり、真嗣は弥勒の手当をしてい

た。女性とはいえ鍛えられている二人の拳を受けたのだ冷やす事ぐらいはしておかなければいけない。

「大丈夫？ 弥勒様」

「はは、些かやりすぎましたね」

真嗣から濡れた手ぬぐいを受け取り、殴られた箇所を冷やし始める。男に看病されるのは嫌だが、仲間であるのなら話は別だ。

「いい加減に自重した方が良いと思うけど・・・？」

「いや、どうしても避けられぬのですよ。この手が」

「ええ・・・」

真嗣は少しだけ呆れながらも、以前飛ばされた時、妖怪の館に招かれた出来事を思い返して納得した。

そうだ、これが弥勒なのだ。

だが、ここで一つの疑問が浮かぶ。一行が旅を再開せずに楓の村に留まっているのは何故なのかと。

それはかごめである。真嗣と彩水とは違い、彼女は現代を歩き来している。それと同時に学校での宿題やテスト、課題、授業への参加、出席日数などの問題もあるのだ。

真嗣と彩水は大学生である故に休学などの処置が効くが、今現在において自分たちがどうなっているかは分からない。

真嗣は何とか現代と行き来出来る方法は無いのかと考え始める。だが、そうやすやすとは浮かばない、可能性があるとすれば飛来骨だけだ。

あれに触って、こちらへ来たのだから帰れる可能性があるのではと思ひ、一度珊瑚さんに頼んで触ったが、何も起こらなかった。

恐らくは気脈、龍脈とか何かの要因がなければ、発現しないのだろう。そう考えていると彩水が真嗣に近づいてくる。

「あの・・・真嗣くん」

「何？ 藤乃森さん」

「その、ごめんなさい！ここに初めて来た時に化物とか言つて！」

彩水は真嗣にしつかりと頭を下げて謝った。真嗣は真剣な声で顔を上げて欲しいと声をかける。顔を上げると同時に真嗣から軽いデ

コピンを貰った。

「痛たっ!？」

「はい、これでおあいこだよ」

「ただ・・・意外に根に持ってたのね」

「当たり前だよ。でも、これでお互い、水に流そう」

「うん!」

◇

そうしている間に、かごめは一時、現代へと戻っていった。学校に出席し、実力テストを何とかしなければならぬとの事だ。

「かごめの奴、大丈夫なのか?」

「大丈夫だよ。こつちで基礎は十分過ぎるほど繰り返したし、予想用テストでも満点になってたからね」

「かごめが居なきや、玉の浄化は出来ねえんだぜ!？」

「仕方ないわよ、かごめちゃんは行き来できる分、学校もあるんだから。こつちばかりには居られないでしょ?」

「う・・・」

現代組の二人にかごめの現状を言われてしまい、黙るしかない犬夜叉。だが、二人も心配しているのは確かだ。

「とにかく、かごめ様が帰ってくるまで待ちましょう」

「法師様の言う通りだよ」

弥勒と珊瑚は戦国に生きる人間として、かごめが帰ってくるのを待つと言った。説き伏せられた犬夜叉はその場で寝転んでしまい、塞ぎ込んでしまった。

◇

その後、各々が時間を過ごしており、そんな中、真嗣はかごめが持ってきていたバスタオルを手に川へと向かっていた。

そして丁度、全身が隠れられるような岩陰の場所を見つけると、そこへ身を隠し川に向かって大声を出した。

「珊瑚さーん!!居るさーん!?!」

その声に珊瑚は反応したが、真嗣の姿は見えない。覗いているのかと疑ったが、小さな式神が何やら合図をしている。どうやら岩陰に居ると言う合図のようだ。

「ああ!今、水浴びしてるよー!」

「かごめさんが使っていいって言ってた大きめの手ぬぐいを置いておくからさー!珊瑚さん!悪いけど水の中に潜るか、身を隠せる場所に居て欲しいなー!!」

これは以前に戦国時代へ飛ばされた時、偶然とはいえど珊瑚の水浴びの場面に遭遇してしまった事があった。

飛来骨を投げられかけた為と同じ徹を踏まないよう、式神を使い自分がいる合図をだしつつ、声をかけるようにして対策したのだ。

「じゃあ、岩陰に入るからさー!着物の近くに置いておいて!」

「わかったよー!」

言われた通りに着物の近くへ置き、すぐに走って戻る。そうしないと、水上がりの珊瑚と出くわしたら間違いない、飛来骨の餌食になってしまうからだ。

男としては見たい気持ちもあるが、それをグツと堪えて村へと戻っていった。合図となる式神を残して。



珊瑚は岩陰から着物が置いてある場所を見ると、そこには紅い小さな鳥のようなものが浮かんでいた。

「何、これ?」

珊瑚が近づくとそれは消えてしまう。どうやら式神だったらしく、真嗣が自分は先に戻った合図として残していったのだろう。

「反省してるんだ...ふふっ」

あの時は偶然だったとはいえ、真嗣は水浴びの現場を見てしまっ

た。裸を見られた訳ではないが、そこは女の子、異性に見られるのはとても恥ずかしくて仕方ない。

「それにしても、あたしと変わらない年なのに、考えは本当に年上になってるんだね」

珊瑚は水辺から上がり、バスタオルで全身の水気を取ると着物を着込み、飛来骨を持って村へと戻り出す。

「真嗣、あたしは・・・まだわからないよ」

珊瑚自身も二人の異性の間で悩んでいた。自分に好意を告白した真嗣、自分の悩みを聞いて気持ちを楽しんでくれる弥勒、どちらも大切だと自分は言うが、どちらかを選ばなければならぬと。

「つて、まだ答えを出すのは早すぎるかな・・・でも」

今は分からないという思いを秘めたまま、珊瑚は帰りの道を歩いていった時だった。

「あれ?」



珊瑚にバスタオルを届けて戻る途中、真嗣は日課になっている鍛錬をまだ行っていない事に気づいた。

「お昼までまだ時間はあるし、簡単な筋トレ位はやっていこう」

そう呟くと上半身だけ裸になり、準備運動と身体の柔軟体操を始める。今の彼の身体は年齢にしてはかなり鍛えられている方で体幹も強く、太腿も筋肉で太くなっている、腹筋も割れ目が見えかけている。「ふう、よつと!」

自分の体重をさせられるような木の枝に捕まり、懸垂の要領で腕の筋肉を鍛え始めた。最低でも20回、目標は100回こなす事だ。

「く・・・懸垂はやっぱキツイ」

身体を鍛えている彼を遠巻きに珊瑚は見つめていた。ひた向きに頑張っている姿を見て鼓動が早くなってくる。

「え・・・どうしたんだろう?あたし・・・鼓動が早くなってる?」

懸垂をなんとか20回こなすと、真嗣は次に自分の体重を支えられ
そうな枝を見つけ、そこに両足をかけて背筋を鍛え始める。

現代でもトレーニング器具を使って鍛えていた方法であり、それ
を自然の物を利用してしている。肉体だけが若返ってしまったが、鍛えて
きた持久力だけは残っていたようで、鍛え続けている。

「よ……し、後は……腹筋」

吊られているような体制に変えると、腹筋を鍛え始める。しばらく
して鍛え終わると木から降りて呼吸を整える。

今の彼は呼吸が荒く、全身から汗を流しており輝いているように見
えていた。

「真嗣」

「はあ……はあ……ふう。え……珊瑚さん？」

「ああ、そうだよ。それにしてもあんた凄いね？こんな汗だくになる
まで鍛えてるなんて」

「日課になっちゃってるからね」

「ふうん、それより着物を直しなよ。見てるこっちが恥ずかしくなる
から」

「あ、ご……ごめん！」

指摘された真嗣は急いで着物を着直すと珊瑚に向き直った。珊瑚
は内心何処かで惜しい気持ちがあったが、気の迷いと考え、頭から考
えを消した。

「さて、そろそろ昼餉だから戻ろうか？七宝とも約束してるし」

「そういえば、あんたが作るんだったね？あたしも楽しみしてるよ」

「はは、それじゃ戻ろうか？珊瑚さん」

「そうだね」

二人で楓の村に戻り、真嗣は井戸で軽く汗を流した後、昼餉の支度
に取り掛かった。途中でかごめも合流し、台所はまさに二人の勝負場
所になっていた。

真嗣は村で交渉して手に入れた卵と、弥勒が手に入れてきてくれた
米を使って何かを作っている。

「あ……もしかして、それって！」

「そう、一番良いでしょ?」

お腹を空かして待っている皆の元に湯気が上がっている鍋が囲炉裏にかけられる。蓋を開けると黄金色に輝く粥が入っていた。

真嗣が作ったのは卵おじやであった。戦国の世の中からすれば最高級の料理だろう。

「おお!?何だこりやあ?粥か?」

「黄金色に輝いていますな?」

「何が入つとるんじやろうか?」

「すごく良い匂いだ」

「はい、じゃあ渡していくよ。熱いから気をつけてね?」

真嗣は一人一人におじやを器に盛って渡していく。かごめが作った料理も出されていき、食事の合図も済ませると皆が一斉に卵おじやに口をつけた。

「あっち!けど・・・何だ!?コイツもすつごく美味え!!」

「粥に卵を入れたのですね、なる程・・・確かに栄養も取れ身体も温まり、腹も膨れますな・・・!」

「はちち・・・ふーふー、犬夜叉が言った通りすつごく美味いぞ!」

「普通に食べても、身体が弱った時でもこれはいいね。なにより食べやすい」

「うーむ、粥にひと手間を加えるだけでこれ程までに美味しいとは」

「あ、おかわりもあるからね?」

「盲点だったなあ・・・卵おじやなんて思いつかなかった」

「現代では当たり前前に作れちゃうからね」

「風邪の時ぐらいにしか食べないしね」

現代組も箸を動かしている。三人も自然が生きたものを食べるのは初めてだ。この昼餉が功を奏し、賑やかな食事となった。

「ちよつと、犬夜叉!盛りすぎだよ!」

「いいじゃねえかよ、美味いから幾らでも入るぜ!」

「ふむ、では私も、もう一杯頂きましょうか」

「弥勒様まで・・・!」

「あ、あたしも!」

「珊瑚さん!?!」

「オラも!」

「七宝も!?!」

結局、戦国組全員がお代わりを要求し、鍋はすっからかんになってしまった。もちろん現代組も二杯目を食べ終えている。

「いやー、美味かったな!」

「柄にも無く、食べ過ぎてしまいましたな」

「うー、オラもう動けん」

「本当だね」

苦しいとは言っているが、全員が笑顔だ。食事というものは楽しくするものだ。それを横目に真嗣はかごめ、彩水と共に食事後の片付けをしている。

「料理作戦成功・・・かな?」

「真嗣くん、料理も上手だったなんて盲点だったわ」

「本当ね」

「まあ、母さんから教わったりしていたからね」

片付けも談笑も楽しく過ごした一行は旅に向けての準備と、目的地を考るのであった。